
ネギま！ ～二人目と呼ばれた男。～

ノクト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ネギま！ ～二人目と呼ばれた男。～

【Nコード】

N1949W

【作者名】

ノクト

【あらすじ】

青年は、神に選ばれ、世界の抑止力となった。数多く不適合な転生者を『世界』から排除する為に。

その世界の名は……『ネギま！』。

この作品は、ネギや、正義の魔法使いに対してのアンチ要素があります。

始まり（前書き）

『とある魔術の死神戦記』が優先されるため、この作品は、更新が中々できないですが。

生暖かい目が、白い目で読んでください。

始まり

S i d e ? ? ? ?

「何処だ……此処は……？」

目が覚めたら全てが純白な世界が広がっていた。

「何で……ンなトコいんだよ」

「お前は死んだのだよ」

……何か聞き逃せないレベルの声が聞こえた方を見ると、とあるのアレイスターみたいな人がいた。

「つまり、アンタは神でアンタが俺を作為的に死なしたと……」

「神というのは比喻だ。そうだな……管理者と言っておこう、すまなかつて」反省の色が見えねエンだよッ！！！！」ぐボハア！？」

顔面にドロップキックを咬ます。

「人ブチ殺しとして随分飄々としてンじゃねエか、あア！？」

「ずつ……ずばん……お前をごろぢたのば、理由があつてだな」

鼻から滝のように出る血を押さえてるが、気にしない。

「最近、天使達で死んだ人間を転生させる遊びが流行っているよ。うだ。残念ながらその中に下衆な者が好き勝手しようとするのだよ」

あー、大胆読めた。

「だから俺を世界の修正力としてその屑どもを狩れと？」

「聡明だな、理解が早くて助かる。やはり君を選んだのは正解だった」

面倒だが、コイツは他に選択肢を残す様な奴じゃあ無さそうだな。

「報酬は？まさかタダで働けっーんじゃねェだろ」

「ふむ、そうだな。その世界を君にやろつ。」

「……………は？」

すると、してやった的な笑みを奴は浮かべやがった。

「ははっ、流石に君も予想外だろう。そう、その世界は君の思いのままだ。」

「良いのか？そんな暴挙。修正力に修正力が働きそうだなア」

「それほど転生者が多いのだよ。まあ安心しろ。奴等と原作キャラの繋がりはない。」

……………原作？

「……………ちょっと待て、その世界の名前教えろ」

「ネギま」だ」

.....頭抱えていいか？

「何を言う。既に抱えているではないか」

冷静なツツコミ有難うごさんしたクソ野郎ツ#

「ははは、どうだ？ハーレムでもやってみるか？」

「ンなモン現実に出来る訳ねエだろ...」。

二次創作でみんな目指してるが、アホらしいとはおもわねエのか？

「ハア、それで？俺はこのまま転生者を殺せと？ナイフすら握ったことのない、この俺に？」

「安心しろ。君は管理者である私に選ばれた抑止力。最強の超越者だ。既に『世界』の誰よりも強い。だがまあ、君が望むなら与えるが」

「頼むわ。『君、既に最強。』とか言われても実感ねエしよ」

「ふむ、何がいい？」

そうだなあ……転生者対策　つまり、オタクが欲しがる能力の上にいかなきゃいけねエからなア。

「よし、決めた」

「では、聞こう」

「NEEDLESSの全てのフラグメント　つまり神の肉体と神の力、『キリスト・セカンド』のスペックをくれ。」

「フム、『P F・ZERO』ボジティブフィードバック・ゼロはどうする？フラグメントがないから何も覚えられないぞ？」

「そこは技や術、固有スキルを対象にしてくれ、後……」

「どうした？」

「杖と剣をくれ」

「宝具が欲しいのか？」

「違う、サーヴァントだ」

いくらスペックが高かろうが、経験が無ければあっさり死ぬかもしれない。

魔術に最も秀でた英霊と、剣に最も秀でた英霊。

この二人がいれば、一先ず安心出来るだろう。

「了解した。後、転生者は来る時代が様々なので、時折指示を出す。」

「了解。ほんじゃまア、行ってくるわ」

「わかった、世界を頼んだぞ。」

「2次元の世界なの？」

「フッ、それを言われると痛いな。」

俺は光に包まれ、消える様に世界に向かった。

.....あ、そついやどこに生まれか聞く
の忘れてたな。

一人目の転生者（前書き）

タイトルの意味は、二人目のキリスト。という物です。

一人目の転生者。

sideレン

あの後、転生？したんだろうなア。どうやら主人公であるネギの双子の弟として生まれちゃった。

つまり、レン・スプリングフィールドになった訳だ。

そして内在魔力がとんでもない量らしく、大人達は「流石、英雄の息子だ！！」と喜んじまった。

面倒くせエ。

それと、これはとても重要な事なんだが……。

俺の髪は白、目は赤色の、分かりやすく言えば。

………何か………とある魔術の禁書目録
の………一方通行さんにクリソツなんですが。

何故！？Why！？

しかも何でか『王の財宝』ゲート・オブ・バビロン出せるンですけど！？

頼んでねエよ！こんな転生者が真っ先に手エ出しそうな能力！！

しかもッ、俺『魔法無力化能力者』だった！

しかアも！！念じれば『最後の鍵』グレートグランドマスターキー出てきたンですけど！！！！

デйнаミスや、アーウェルンクスに見つかったら終わりじゃねエ
か魔法世界！！！！

何でよりにもよって100年間産まれなかった！利用したい放題
の存在に生まれちゃってンの俺！？

まあ、『フラグメント欠片』は発動出来た。 ツても剣と杖の英霊は未だ現

れず……………はあ。

それと、なんと俺には妹がいる。名前はアリア。アリア・スプリングフィールドだ。

『アイツ』曰く、好きでもないのに転生された、転生者の中では唯一まともな例らしい。原作も知らない様だ。（俺の存在に何の反応もないから）

で、現在、スタンのジイさんの所に来ている。

例の、薬味^{ネギ}がファザコンになっちまった出来事だ。

「そうね、あなた達のお父さんはね、とっても有名な英雄……………そうね、ヒーローみたいな人だったのよ」

「ヒーロー？」

「そう、誰もが危機^{ピンチ}になったらどこからともなく現れて、必ず助

けてくれるのよ」

「へ、ヒーローかつこいい！ ネカネお姉ちゃんも助けられたことあるの？」

「フッフ、それはひ・み・つ・よ」

この言い方だと、ネカネはあのアホ（ナギ）に会ったことがあるンだろオナ。

可能性としては、俺達兄妹が預けられた時に会ったンじゃねえか？

「お兄さま？」

「ン？どうしたアアリア？」

アリアは俺の事はお兄さま、薬味の事はネギと呼んでいる。

何でそう呼ぶかは、何となくらしい。

「ネカネお姉ちゃんが言ってたのは本当なんですか？」

「違エよ」

「えっ？」

おっと、口が滑った。ま、イイか。

「俺達の父親は確かに英雄だ。だがなア、ナギ・スプリングフィールドは大戦の英雄だ。この意味、分かんたる」

「……………！はいつ！！」

……………よく分かったな。ヒント的な意味だったんだがなア。

何か知らんが、俺がなにか教える度にだか、すごい嬉しいらしい。すごい笑顔だ。

転生者だよな？この娘。

何だ……………この尊敬の眼差しは……………。

皮肉にも、最初の転生者はとても身近にいた。

取り敢えず、排除しない方向で。

金髪幼女と自称正義の魔法使い（ヘンタイ）（前書き）

展開に捻りがない、ご都合全開。

金髪少女と自称正義の魔法使い（ヘンタイ）

S i d e レ ン

薬味ファザコン化事件から1年たった。

あの後、ナギ（アホ）の真実をある程度アリアに話していた事を、薬味が知ったか知らないか、明らかに俺を敵視してきた。

まあ、自分のヒーローが、実はアンチヨコ見ながら呪文唱えての魔法学校中退とか言われたらなァ。

別に評価すべき所は評価しただろうが、どっちかつつと、母さん
アリカ王女を尊敬するわ。

それと、アリアが凄く懐いてきた。しっぱがあるならブンブン振ってると、容易に想像出来るぐらいに。

まあ、俺の指導で、自称正義の魔法使いがどれだけ歪なのかは理解した様みたいだ。

転生以前が何歳かは知らんが、基本は誰にでも素直で、可愛いげのある妹だ。

ただ、薬味が俺の悪口を言った時、いつもでは信じられねえぐれエにブチキレた事があった。

俺の悪口に対してキレてくんののは嬉しいんだが、薬味がまるで集団リンチにあった様な状況になったア。

それから、薬味は表立って俺の悪口を言わなくなった。

一体どんなチート押し付けられたんだ？

つか、俺が絡むとアリアの沸点がやたら低くなる。そんな好感度上げるよオなことしたか？

俺は『世界』からのバックアップが知らんが、ほぼ全ての魔法を4歳でマスターした。

フラグメント

欠片も、ミッシングリンク級の能力も完全にマスター出来た。

そんな時、

『レン、聞こえるか？』

「ああ、聞こえるぜ。久しぶりだな、どおかしたか？」

『仕事だ。ある程度の転生者の時間軸を捕捉した。今から向かって欲しいが、構わないか？』

「それが俺が此処にいる理由だからな。今、この時間軸に戻してくれんなら構わねえよ。一応聞いておくが、何時だ？」

『おおよそ、600〜400年前辺りだ。』

完璧エヴァンジェリン狙いだな……。

「転生者はロリコンの変態ばっかか」

『流石に四歳の体ではキツいだろうが、頼む』

オマエって、そういう所は氣イ使っよなア。

「気にすんな。それが俺の仕事だ」

『すまない、では送るぞ』

俺は光に包まれ、その瞬間、レン・スプリングフィールドは消えた。

「ここか……………」

俺の意識が戻った瞬間。見たこともない森の中だった。

今はいつだろう、大体ここは何処だ？

「面倒くせエ……………もちつとマシな場所はなかったのかア？」

ザザッ

誰がいんのか？まあイイ、取り敢えず姿を消すか。

「『バミューダスポート』」

コイツは、物体を透明にする能力だ。

認識障害の魔法と合わせれば、姿を隠すにはもってこいだ。

現れたのは金髪の少女だった。何かに追われたのか、足は泥にまみれ、息は荒かった。

成る程、この娘がエヴァンジェリン^{ガキ}か。

……俺も人の事言えねエが。

しかし、原作時では見たこともない程、怯えていた。

すると、エヴァンジェリンを囲むように現れる杖を構えた男達。

おそらく正義バカか、賞金稼ぎだろうな。

「やっと追い詰めたぞ吸血鬼。この化け物が」

ピクッ

「何で……私が何かしたんですか！？なにもしていないのに……」

「貴様の様な化け物は存在自体が悪なのだ！正義の鉄槌を受けるがいい！！」

ブチッ

ああ、限界だわ。

エヴァンジェリンに攻撃魔法が放たれ、煙が立ち上る。

「フ……………、フハハハハハ！倒したぞ！！これで私も『立派な魔法使い（マギステルマギ）』だ！！！フハハハハハハ」

「黙れよ、ドカスが」

「！？」

イカンなア、アリアの教育上非常にイカンわ。

「だ……………誰？」

「ベタな展開になってきたな。明らかに殺られ役が出てくるなんぞ」

「な……………何だ貴様！？我々正義の魔法使いの邪魔をするのか！？」

「悪いな、明らかに幼女追っかけ回す変態が編隊を組んでやってきたよオにしか見えねエよ」

さアて、判決の時間だ。

金髪少女と自称正義の魔法使い（ヘンタイ）（後書き）

ヒロイン募集します。

エヴァらアスナと木乃香は決定済みです。

駄文ですが、感想待ってます

600年前で初実践（前書き）

四歳児が饒舌で説教……………シユール。

600年前で初実践

sideエヴァンジェリン

私は10歳の誕生日、吸血鬼にされた。

人々からは、化け物と呼ばれ、不老不死で成長しないから、一つの場所に三年は居られない。

ただ見えない刺客から逃げ続ける日々。どれだけ優しくしてくれた人でも、私が吸血鬼である事を知れば、途端に態度が変わる。

私も魔法が使えるれば、幾らかやり様があるけど、教えを乞う人なんて知らない。

そんな時、私は襲撃を受けた。魔法世界の魔法使いが、正義を楯に旧世界に進出してきていた。

勿論私の事も耳に入っただけで、賞金を上げて討伐部隊を作ったと、風の噂で耳にした。

その数日後、私は討伐部隊に見付かった。私に良くしてくれていた人が通報したからだ。

私はどうすればいいのだろう。私は誰を信じればいいのか……..
……………？

ついに、私は追いつかれて諦めかけた時

。

彼と出会った。

s i d e o u t

s i d e

「君！！ソイツから離れろ！」

（おお、よやく目の前にいるのが四歳児と気付いたか。オマエ等眼科か脳外科行きやがれ、マジで心配になってきた。主に頭ッ）

「おい、大丈夫か？目立った傷とか無エけどよ」

レンはアホ共にガン無視を決め、エヴァンジェリンの傷を診た。

「た…助けて……くれたの…？」

「悪いが偶々だ。そりゃア幼女暴行を現行犯で見ちまったんだ、助
けんだろ常識的に」

「ありがとう……って、私は幼女じゃないよ！！君の方こそ幼児じ
やない！」

実際、エヴァンジェリンは姿は少女だが、今は20歳を越えた辺りだ。反論したくなるのは至極自然。

「聞け！！！」

無視され続けた男は、確実に聞こえるため、大声で叫んだ。

「何だよ、幼女暴行犯のオッサン。刑務所にまでは同行してやるから、今は黙ってお縄についとけよ」

「誤解だ！ソイツは危険なんだ！離れないと殺されるぞ！！」

「ハア……………で、ンなコトすんのか？金髪幼女」

「しないよ！！だから幼女じゃないよ！」

（つか誰だコイツ、さっきから口調が別人なんだが。
ッ！そうか、きっと厨二病感染前か！　つまり、今からちゃんと教えていけば、あんなサボタージャー娘になる事もない！）

……レンは、何かエヴァンジェリンの将来の事を考えていた。

彼女はちゃんと社会に適合出来る大人になれると考えるに至ったのだが。

その社会が糞の掃き溜めなら話は違う。

「危険つけけどよオ、こんな金髪幼女の何処が危険なんだ？俺にはアンタ等の方こそよっぽど危険だと思うんだが？（あの様子じゃア、まだ何もしてなさそうだしなア）」

「君はソイツ正体を知らないから、そう思っただけだ！」

「……………やめて」

「正体？」

「そうだ！ソイツは人間じゃない！！！」

「やめて！！！」

それは悲痛。

おそらく、初めて助けてもらえた人に聞かせたくないのだ。

レンにまで拒絶されれば、エヴァンジェリンは完全に絶望するだろう。

「吸血鬼！！それも真祖のだ！分かるだろう、ソイツは化け物だ！！！」

「へエ、だからそんで何？」

と言っても、レンにしてみれば真祖の吸血鬼だろうが何だろうが、害意が無ければ大した意味は無いだろう。

「……………は？」 「えっ？」

「真祖の吸血鬼つつんなら、別に人間を襲って血を飲まねエといけねエ訳じゃねエだろ。しかも本人には何の敵意も無い。一体何処に危険があるつつうんだ？」

「だから……ソイツは化け物で……」

「寧ろ人間より高位な存在。敬うのは判るが、化け物扱いとは……自分より強者は認めようとしない。まあそれは確かに人間の性^{さが}の一つだ」

だがな、とレンは続ける。

「残念だが、それは絶対に正義なソてモンじゃねエよ。そんなモンはただのエゴだ」

少し考えたらわかるはずだ。化け物〓悪、これは絶対に間違ってる
とは流石に言えない。しかし、真祖の吸血鬼〓化け物にはならない、
そこに心が有る限り。

レンに言わせれば正義バカの掲げるものは、正義どころか偽善ですらない。

「そ、それは……「オイ、そんなガキの言う事なんて関係ねエだろ。コイツを殺したら俺達は『立派な魔法使い（マギステル・マギ）』になれるんだ」

先ほどレンのドカス認定を受けたもう一人の男に至っては、その思考は最早善悪以前に屑だ。

「こんなガキ、まとめて殺しちまえばいいだ」「オイ、其処のドカス。話の腰を折ってンじゃねエよ」……なんだとクソガキ!!」

故に、負の禁線に触れる。

「ボリユームデカけエ。喧しいンだよピーピーピー嘖ずりやがって、小鳥かデメエは!？」

「なッ、デメエ……………殺す!!」

（おやまア、ガキの挑発で殺す……………か。コイツの性根は腐り切つてやがるな）

「待て！！その子を殺す理由は無いだろっ！やめ」

「死にやがれ！！『雷の暴風』！！！！」

自分の欲に溺れた男は、強烈な風を纏った電撃を放つ。

『雷の暴風』もしレンと同年の子供が受けたら間違いなく死ぬだろう。

しかし残念ながら、それが魔法である限り、レンには届かない。

レンに当たる前に、消えてしまったのだから。

「なッ……………！？」

マジックキャンセル
『魔法無力化能力』

始祖アマテル末裔、黄昏の姫御子と同じ力。全ての終わりと始まりの力。

「オマエは殺意を以て俺に接した。だったら殺される覚悟があるんだろうなア」

レンは、一瞬で男の懐に入る。魔法は使っていない。

純粋な膂力、其だけで、音速に至る。ソニックブームの衝撃をもろともしない神の肉体。

そして、『神の力』。
フラグメント

「『リトルボーイ』」

レン曰く 地殻すら叩き割る拳が、灼熱の爆撃に
早変わり。皆、周りに気を付けようねッ

男は拳を受けると爆散し、肉片すら蒸発した。

「判決、

死刑」

飛ンで火に入る夏のバカ（前書き）

修正しました。

飛んで火に入る夏のバカ

sideレン

予想以上の威力だったな。リトルボーイであの威力か……。エデンズシールド解放したら、マジビッグバン起こせそうだなア。

俺は爆散した屑の事など気にも止めず、もう一人の男の前に立った。

「逃げたり抵抗したりしねエのか？」

「無駄……。だろうな。何かしようとしたら僕はアイツと同じ様になっっているだろう」

成る程、幾らかマシか。生かす価値はある。

「……………討伐隊から元老院の老害共に連絡しろ。もしコイツを狙ったりしたら魔法世界ごとオマエ等を潰す、とな」

エヴァンジェリンを指差し、

実際はやる気など更々ないが、ハツタリではない。魔法世界はリライトを研究していけば、おそらく一年で実行出来るだろう。火星そのものを破壊すれば手っ取り早い。

「……………伝えておく」

男はそう言い残し、にその場を離れた。

「さアてと、大丈夫か？」

「はっ、はい。ありがとうございます。助けてくれて……………その……………」

なんか、えらくどもるな。

「どオした」

「こ……………怖く……………ないんですか？私、吸血鬼なのに……………」

「その話はさっき言っただけだよ。そんなモンは関係ねエ、危険度だけだったら俺の方が明らかに高エだろうが」

人間爆砕した四歳児つてのも、恐怖だぜ？

「オマエ、名前は？」

「あつ、エヴァンジェリン、エヴァンジェリン・A・K・マクダウエルです」

「了才解。俺は……………」

このまま本名言ったら不味イよなア。ベクトル操作出来るンなら、一方通行って名乗ってたんだが。

「……………ブレイドだ。つってもコイツは偽名だ。俺は諸事情で簡単に本名名乗れねエンだよ」

「判りました。…そ、それで、貴方はこれからどうするんですか？」

フム、確かにこのままエヴァンジェリンと同行してりゃア、寄ってきた屑共を楽に駆除出来るしなア。

……『アイツ』はこれを考えて此処に送ったんじゃないか？

「……………一緒に来るか？」

手を差し伸べると、まるで奇跡でも観たように涙を流しながら満面の笑みで、俺の手を取った。

「……………ッ、はいっ！！」

存外、悪イ気はしねエな。

その後、俺達は、紛争地域に行き、怪我人ややなんやらを治ま
くったり、助けた。流石に四歳児の姿はアレなので、『^{ドッヘルゲンガー}変身』で
姿を12歳くらいに成長した姿でいることにしたが。

そのせいか、「キリストの再来」とか「神の子」とか呼ばれはじめ
て、漸く自分のやったことがキリストセカンドと同じ事だったと
気付いた（。。。）！

そんな俺と一緒にいるからか、エヴァンジェリンも迫害される事は
無くなった。

そして旅の途中　　。

「ブレイド、魔法を教えて!!」

「……それはまたいきなりだア。ンで、何でだ？」

「魔法使いが私達を襲ってきた時、何時もブレイドが助けてくれる
けど、いつまでも守られるのはもういやなの。私もブレイドと一緒に
に戦いたい!それに………ノノノノ」

「それに？」

「なつ、何でもないよ。／＼／！」

「…………、そオだな。教えてもイイ」

「本当！？」

「あア。ただ、魔法ツてもただの力だ。力の使い方を間違えたら、あの正義語った屑共にも成り下がる。ソレを忘れンじゃねエぞ。」

「はい！」

つて事でエヴァンɡ「エヴァって呼んで！！」…………エ
ヴァに魔法を教える事になった。

真祖の吸血鬼のスペックや、元々才能が有ったのか、エヴァはメキ
メキと実力を付けていった。

ラカン強さ表では大体7000くらいはあるだろう。

更に最近『^{マギア・エレベア}闇の魔法』を編み出して更に強くなっていた。

エヴァが披露した後に、即『^{ゼロ}ZERO』で覚えて使ったらかなり落ち込んでたのは、よく記憶に残ってたなア。

ン？俺？分かるわけないだろうが。大体『^{フラグメント}世界』の修正力としての力が数字で表現できたら苦労しねエ。魔法と欠片無しで絶壁走れるしなア。

エヴァがそれなりに自衛出来る様になったんで、旅の行き先を魔法世界のアリアドネーに移した。

彼処ならエヴァも受け入れてくれンだろ。

ゲート？ンなモン使わねエよ。

それはな・ぜ・か！『王の財宝』の中にディーグレイマンの『方舟』

があつたんだよ！！

どうなつてんだ！？と思い、中に有るものをある程度調べたら、他作品の道具や武器がわんさか入っていたのは本当に驚いた。

エヴァのリアクションは、もう何かを諦めた様な顔をしていた。

俺もそだよ。

で、魔法世界に着いたら又もや災害地区に遭遇。

なんでもメガロメセンブリア………連合のバカが襲つたらしい。亜人ばかりだったからな。

どオやらメガロメセンブリアの『人間』は亜人達を人扱いしてねエみてエだ。

この村の亜人達の角は、秘薬になるらしく、時折メガロメセンブリ
アのバカ共が襲ってきた理由だそオだ。

そのせいで農作物が襲われた時に奪われ、食糧難に陥っていた。

そこで皆の『コード・オブ・ザ・ライフメーカー造物主の掟』。

農作物や資源を片っ端から創ってやった。かなり適当だったが案外
簡単に出来るモンだな。

村人達は、俺達の事を『マギステル・マギ立派な魔法使い』つつた奴は全力で否定し
たから、『マギステル・マギ立派な魔法使い』とは呼ばれなくなった

誰が好き好んで老害に手柄渡す様な事するか。

その後、空気を読めない馬鹿共が襲来。

馬鹿共にはあの世への片道切符をプレゼントしてやった。

そして、改めてアリアドネーに向かい、出発した。

俺は、何時でも周囲を『糸』で包囲網を形成してる。バミューダアスポートで不可視にしたら完成だ。

近くに何かがあれば、糸が震動し気付くし、最悪転生者なら半径10キロ圏内に入ると俺自身が知覚出来る。

そして、遂に網にかかった転生者^{アホ}が現れた。

見た目は銀髪にイケメン。だが中身の劣悪さで、嫌悪感しか感じない。

「（エヴァ、少しの間警戒しろ）」

「（うん、わかった）」

万が一を考えて、何重にも魔法で結界を作る。

バミューダアSPORTをエヴァに使用。これでエヴァを奴は探知出来ない。

「なッ！？エヴァの姿が消えた！？」

「本当にアホだな。自ら姿を見せるなんざよオ」

突如として現れた俺に驚いて思わず後ずさっていた。

コイツ、典型的なワカメ体質か？

「お前は！エヴァと一緒にいたガキだな！！エヴァを何処に隠した！！」

「ギヤアギヤアうつせエンだよ、何の用だ。人の睡眠妨げて迄の用なんたるオなア？」

すると、奴の態度が変わる。慢心と傲慢に溢れた表情だ。

「あ？俺のエヴァを隠しといて、誰に向かって言ってるかわかんねえか？最強オリ主だぜ」

何時エヴァがオマエのモンになったよ。アリア基準で視てたらダメそだな。

魔力駄々漏れ、ろくに制御出来てねエな。

「世界に敵性を確認、排除する。オン・アバタ・ウラ・マサカト
(コレ俺の始動キー)」

まずアイツがどんな力を貰ったか確認して、対応するか。

「魔法の射手、連弾・光の1000000000矢」

「ハアッ！！？」

後のエヴァは、こう語る。

あ
れ
は
か
？

旧約聖書の再現がしたかったんじゃない

後の、ソドムとゴモラ、である。（プロジェクトX風）

[illegible]

……神話に出てきてもおかしくない絨毯爆撃をしたんだが……まだ生きてンな。

「はッ……ハッ…ま、また死ぬかと思っただぜ……『一方通行』選らんで良かった……」

「自分から手の内晒してくれるとはな、転生者はスペックが高くとも、中身はただの素人だからしゃあねエか。」

いきなり目の前に現れた俺に、またしても後ずさる。

ワカメ体質確定だなア。

「ハハッ！ だったらなんだ！ 俺にはどんな攻撃も効かねえ！！ 諦めて俺のエヴァを渡せ！」

「アイツは誰かの所有物じねエよ。……にしても一方通行かア……イイコトオ聞いたなア『カンダタストリング』」

「へっ？」

バミューダスポーツで不可視にした、無数の斬系でドカスを拘束する。だいぶ深く切り込み過ぎたか。拘束した後にバミューダスポーツを解除。勿論意味はある。

「ギッ……ギャアアアアアア！！？ なっ、何だよコレ！？ ぜ、全然切れない……ベクトル操作が出来ない！！？」

当たり前だ。『神の糸』の数値を入力してる訳ねエだろうがよ。

「切れねエのは当たり前だ。それを切れンのは神だけだ。テメエ等
転生者風情がどうこう出来るモンじゃねエンだよ。」

エターナル・ディストーション」

コイツは『サイコネシス』応用し、相手を吹き飛ばす技だ。欠片
は反射出来ねエなら、倒すのは容易い。
フラグメント

「……………クソオ!!」

奴はベクトル操作で大気を収束。プラズマを発生させるが『風』
で
計算式を乱した
ウインド

「つかオマエ、風系の魔法とか使われンの分かりきってンのによく
やろうとしたなア」

「グッ……………!! だったらぶん殴ってやるよ!!」

……………ここいらで終わらせるかア。

奴のパンチを片手で止める事で体験、理解した。

「
『覚えた』」

「.....は？」

さア、判決の時間だ。

一時の別れ

side 三人称

「覚……えた……？」

その男にしては、信じられないだろう。天使と名乗る者から貰った力を覚えた等と、信じられる筈がない。

「ああ、そオだ。信じられねエか？」

「当たり前だ！！何だその力は！？」

「オマエ等みてエな、チカラア貰っただけのバカには丁度イイだろオ！！」

ガンッ！！と、右足を地面に叩きつけると、レンを放物線上に罫が入り、破片がまるで転生者 男を狙う様に向かう。

男は少し身動きながらも反射でこれを防ぐ。

その身動きが隙となり、

「『デインタードライブ・F・H』」
フォックスサウンド

一瞬で男の後ろに回り込み、音速の数倍の速度で連撃を叩き込む。

「ガッ……何で……反……射が効かない……!?!」

「オマエの演算能力と俺の演算能力が勝負にならなかったンだろ」

「そ、そんなはずがあるか!! オリジナルの俺より、偽者のお前が勝る訳が「なア、ポジティブフィードバックって知ってるか?」ッ!?!」

「正帰還、核分裂なんかには代表されンよオに、ある反応が増幅促進される現象……。この意味、分かるか?」

「……?」

「……そして、俺の能力はただ覚えるだけのチカラじゃねエ」

「……ま、まさか……！」

「俺が覚えた力は、より高い次元に昇華されんだよ」

相手の力を増幅し、強くして覚える欠片。フラグメント

それがレンの『ボジティブファイゼンバックPF・ZERO』の能力。

そう、だからこそレンは『フラグメント欠片』を求めた。

転生者達^{あいて}がどのような力を貰ってしようが、レンは常に相手より強い攻撃が出来る。

力任せの転生者を倒す事など、造作もない。

「オマエを見れば大体の力量は分かる。貰った力は『一方通行』と膨大な魔力、って所か」

「!!」

「凶星みてエだな」

「うるせえ!!」

男は、ただ力任せに突っ込んでいく。それ以外の努力などしていいのだから、方法はそれしかない。

冷静に考えたら、分かる筈なのに。

一方通行に力任せが通じないのは、その男が一番わかっていた筈なのに。

男の拳は、レンの体に触れた瞬間、反射され、右手首が折れる。

「ぐあああああああ！！！！！！？」

「貰いモンのチカラなんかじゃねエ。努力を積み重ねて手に入れた力だったら、俺に勝てたろオナア」

「ぐあああ……クソ！クソクソクソ！！何でだ！！どうして……。俺は最強のはずなのに……ッ！！」

「オマエが力に慢心せず、それを高める努力をしたら……最強になれたかもナア」

男の足下から、熱を奪われている様に凍っていく。

「か、体が……凍っていく……!？」

熱エネルギー吸収能力
がないからだ。

などと、レンは言わなかった。必要

レンの掌に、吸収された莫大な熱エネルギーが収束されていき、

「い、嫌だ……死にたく」

男の目の前で、放たれた。

「悪いなア

」

「誰に敵に回したか、分かってンか？オマエ」

『第四波動』。

数日後、二人はアリアドネーの魔法学校にたどり着いた。

「此所がアリアドネーか……。エヴァ、入学手続きすんぞ。」

「うん。でも、私ここに入学する意味あるのかな？」

「あア。ここの卒業生になる事が重要なンだよ。そうすれば、最低アリアドネーとヘラス帝国から危険視されることはなくなる。吸血鬼の真祖だろうがな。メガロメセンブリアの魔法至上主義バカは兎も角だなア。」

メガロメセンブリア

彼処は、あれは最早狂ってると言ってもいいだろ。とレンは付け足した。

アリアドネーは学ぼうという意味さえあれば、犯罪者でも受け入れてくれる。

自分がいなくなっても、抑止力になってくれると信じて。

理解者になってくれると信じて。

「ブレイド。お願い事が有るんだけど、聞いてくれる？」

「何だ？厨二病発病権は絶対に駄目だぞ。」

「バックティオー仮契約して」

「……………いきなり何だ？」

「ブレイド、行っちゃうんでしょ」

「……………」

「だから自分がいなくても、私に味方になってくれるから、アリアドネー此処に
来たんでしょ？」

「……………あア、そうだ」

この時代にもう転生者はいない。

レンは最初の転生者の襲撃に、近距離に複数の転生者も確認した。

エヴァが寝ている間に、結界を張り、潰しに行っておいたのだ。

エヴァにも、絶対ではないが、ある程度の安全も確保できた。

故に、この時代に留まっている理由はなくなった。

「よく……分かったな」

「何年一緒にいると思ってるの？わかるよ」

「……そオだつたな」

「だから、ブレイドとの繋がりが欲しいの」

「……………なんかエロいな」

「真面目な話してるんだよ／＼／＼！！？……………まったくブレイド
つてば、変な所で…………「レンだ」…………へ？」

「レン・スプリングフィールド。これが俺の本当の名前だ」

「……………！ 言っちゃってよかったの？」

「嫌が応でも仮契約すんだろ？ だったら隠してる意味はねエ」

「…フフフツ、よく分かったね」

「何年一緒にいると思ってんだよ」

「そうだったね」

二人とも笑い、そして理解者として認め合えた。

魔法陣を書き、準備を始める。

「エヴァの血つてすぐ蒸発するけどよオ。仮契約には問題なさそうだなア。ツと、出来た」

「……………（ジト目）」

レンはナイフを取り出し、宝石に血を垂らす、

「ほれ、ナイフdんむッ／／／！？」

次の瞬間、エヴァはレンの唇を奪っていた。

「んむ……………ぷはッ！ん、ぐちそうさま」

「何がごちそうさまだテメエ！！？……………一応、初めてだったんだぞ／／／／」

「グハッ！！／／／」

「エヴァ！？」

エヴァの、出血による失神 は置いといて。

レンの前に、光に包まれた扉が出現する。

「敢えて言おう……倒れて悔い無しと！！」

「オマエ誰に向かって言ってるんだ？………ったく、じゃあ行くぜ。」

「うん。また……会えるよね？」

扉は開かれ、光がレンを包んでいく。

エヴァの眼は、不安ながらも仮契約カードを握りしめ、確かに道を観た眼だった。

「立ち止まるな、歩き続けろ」

そう言い残し、霧の様に輪郭がぶれ、そして何時しかレンは消えていた。

エヴァは、音では聞こえない言葉をカードを通し、確かに聞こえていた。

ンなモン、当たり前だろが

。

一時の別れ（後書き）

ヒロインアンケート募集しています。

現在、真名一票

刹那一票

千雨一票

アキラ一票

刀子、シャークティ、しずな先生陣。

確定者 アスナ 木乃香 エヴァ。

大分裂戦争へ（前書き）

ちよい無理矢理感が出てますが、勘弁してください。

大分裂戦争へ

side三人称

「何でまたここにインだよ。」

光を抜けた先は、レンにとっての始まりの場所だった。

「御勤め御苦労様、と言いたいが。仕事だ」

瞬間移動の様に管理者は現れた。

「早エよ、別に構わねエけどよオ。ソレが俺の存在理由みてエなモンだからなア。」

「働きの者の部下がいて助かる。まあ、残業手当てなら用意している。右手を見ってみろ」

「…コイツは……令呪……！」

レンの右手に刻まれていたものは、確かに令呪だった。

「これでサーヴァントを喚べ。今後は特に戦地だ、一人は辛かるう。精神的に」

「サンキュ。……で？本題は？令呪を渡したいが為に態々呼んだ訳じゃあねエだろ」

「ああ、実は君の魂が神格化してきたのだ」

「……………はア？」

ザ・ワールドッ……時よ止まるッ！

「いや、元々素養が有ったのだよ。私が抑止力にしたのがだめ押しだった様だ」

「イヤイヤイヤー！抑止力が神格化つてどオいう事だアー！あり得ねエだる理屈的に！！！」

「ハッハッハッ」

「ハッハッハア！？華麗エにスルーしてンじゃねエ！ー！あまりの展開に誰もついてけねエよ！！！」

「嘘だ」

「エデンスシード解放オオ！！！」

レンの右腕に『^{スレイグマータ}聖痕』が浮かび上がるッ。

「『第五波d「君がとある神の性質を帯びてしまったのだよ」……………なんだと？」

「つまり、転生者ブチ殺してる抑止力としての俺じゃなく、レン」
スプリングフィールドとしての魂が神格化したと？何でそんな面倒クセエ事になってんだ。神ってのは信仰されねエと生まれねエン
だろ？」

「君は中々の善行をしたらどう？君に助けられた者は『神の再来』
と崇められて……そんな嫌そうな顔をするな」

「すんに決まってるだろうが」

レンにしてみれば、頼んでもいないのに人が勝手に崇め、そのせいで自身が変革してしまったのだ。

自業自得と言えばそれ迄だが、レンにとっては迷惑千万である。

「あんなモン只の自己満足だ。」

「君にとっては自己満足でも、助けられた者はそう思ってはいない。
ただそれだけだ」

「…………チツ、クソツタレが。で、なんか変わんか？行動が制限されるとかよオ」

「君は欠片フラグメントを持つと同時に、神格者としての力も持てる。喜びたまえ、パワーアップだ」

「これ以上強くなる必要あんのかよ……。で、どんなチカラなんだよ」

「君が神格者として名乗る名によってそれは決まる。ま、基本は封印状態で落ち着くが」

名前ねエ……。と、レンは暫く考えた。

「…………決まっただぜ」

「ならば聞こう」

「がおうきしたけはやすさのうのみこと
我王紀士猛速凄乃男命、てのはどオだ？」

レンが名前を言った瞬間、レンの中に何かが生まれた。

「あらゆる魔の根源……か。やはり君は発想力が凄いようだ。いや、
妄想力が「叩き潰すぞ」……フツ、冗談だ」

もし直ぐ様訂正してなければ、管理者が一人不在になる所であった。
いやマジで。

「次の時間軸は……って大分裂戦争時に決まってるだろうなア。
絶対」

「ああ、ここが一番の踏ん張り所だ。頑張ってくれ」

「ハア……。面倒だ」

「しかし……………、何故淒王にしたんだ？態々、究極の魔など」

「……人間ってのは、話したら皆が判り合える、なんて事は絶対に有り得ねえ。これは真理だ。」

レンは、人の醜さを前回の仕事場で良く理解していた。

解り合える者もいるが、世界にはそういう醜い人間もいる。

「人を動かすのは恐怖だ。そして、人にその愚かさを気付かせるのも恐怖だ」

優しさで理解してくれる者には救いを。

理解出来ぬ程の愚か者^{クズ}には絶望をくれてやる。

それが、今のレンの精一杯の答えだった。

「思いついてるのは、解ってるがよ……………」

「…………君は、人間に絶望したのか…………？」

しかし、レンは振り返らない。ただただ、その小さな背中を向けた
まだ。

「ハッ、ンな訳やねエだろうが」

しかしレンは、笑っていた。

「その希望を魅せてくれた奴を俺は、少なくとも一人。知ってるぜ」

「…フッ、そうか」

エヴァとの仮契約カードを見せ、そう言い残すと、レンは光の扉をくぐり抜け、新たな仕事場^{せんじょう}に向かった。

扉をくぐると、そこは戦場だった。

「幾らなんでもいきなり過ぎンだろ。」

こんな両軍がぶつかり合ってるド真ん中にブチ込まれれば、人間そ
うなるだろう。

兵士達は「何だコイツは?」「どうせ帝国だろ」といいつつ、レン
に襲っいかかってきた。

「..... a y u f s c y d k 死 L g p u e a」

戦場に現れた一人の少年が、そう呟いた瞬間、

世界全ての生物を一瞬で殺し尽くせる程の死ノ恐怖が、世界に溢れ出した。

s i d e ナギ

前線で敵を蹴散らしているとアルが声を掛けてきた

「本陣から左翼へ行けという指令が来ましたよ。ナギ」

「何だよ？」

「どうやら帝国からの援軍が来たようです」

「わかった。わざわざ俺を遣わすということはよっぽど強いんだろ
うな。ワクワクしてきたぜ！」

「はあ、お前って奴は」

近くで話を聞いていた詠春が、何か言ってるが関係ねえ

そう考えた時。

ズドン！！！！！！

と、体が悲鳴を挙げた。本能が、此処から逃げろと叫ぶ。

どうやら戦場にいる人間全てが同じ様だ。

「何、だ…これは…ッ!!!!?」

詠春が呟いたら、空から千の雷とは比べものにならない巨大な雷、が前線に落ちやがった。

ゴアアアアア!!!!と、余波が此処まで届いた。

「くっ……!!、オイ!!行くぞお前等!!」

急いで雷が落ちた所に向かう。

其処にいたのは、

そこに在るだけで、死の恐怖を撒き散らす魔の神がいた。

大分裂戦争へ（後書き）

ヒロインアンケート途中経過です

真名二票

楓一票

千雨三票

アキラ四票

夕映一票

先生陣四票

確定者 アスナ 木乃香 刹那 エヴァ以上です。

後、アチャ子の資料を探しています。これは知ってる人がいたら、教えてください。

死の恐怖

sideレン

力を解放したら、兵士達が地面に膝をつき、震え、動かない。

まあ当然だろ。

凄王の特性は異能。ありとあらゆる異能の源。そして究極の魔、真の武、死と破壊の神。其処に在るだけで死ノ恐怖を撒き散らし、死ぬ可能性が有る生物は死ノ恐怖から逃れられない。

力の制御出来なかったからダチできなさそオだな。どオでもイイが。

てか髪長ツ！殆どナマハゲみてエじゃねエか！！

まア、おかげであんま顔分かんねエからイイがよオ。

後で切るか。

トンツと足で地面を叩く。

それだけで通常の数億倍の大きさの雷が落ちる。

それで、前線に出てきた連合と帝国の兵士は、轟音と共に一掃された。

ああ？無理矢理徴兵されたっぽい奴ア殺してねエよ。

「さてさてエ、こんだけ派手にやらかしたら」…走れよ稲妻、千の雷！！！」……………ほオラ来たア」

さアで、力試しといこうか？新旧世界最強オ。

ナギ達がとった行動は極めてシンプルだった。

ナギは千の雷、ゼクトは燃える天空、詠春は真・雷光剣、ラカンは核兵器並の威力のある気弾、それを直撃させる為、アルの上空からの重力魔法。

それぞれが、乙のが持てる力の全てをこの不意討ちに賭けたのだ。

それは外したら負けと直感したからこそその行動だった。

しかし。

バチン！！

その全てを、少年は片手を無造作に振っただけで弾き、かき消された。

しかも、重力魔法と千の雷は弾かれた瞬間消失。燃える天空に到っては吸収された。

「「「「「!?!?」「」「」」」」

その弾いた腕すら傷一つ付いていなかった。
紅き翼の面々は、全力で距離をとった。

少年は片手を挙げ、

「カカツ」

瞬間、空が八匹の龍に埋め尽くされた。

side 詠春

これは一体何だ!?

自分たちの全身全霊を込めた一撃を簡単にかき消し、上空全てを覆い尽くす程の龍を喚ぶ。

こんなもの、神話にしか聞いた事がない。

「何だ……これ……!？」

ナギが呟きアルビレオも口を開く。

「あの八匹の竜は一体……龍ではない!知っているのですか!?ゼクト!!」

「あれは上空に集まった莫大な気、魔力じゃ。その世界を包む程のあまりのエネルギーが行き場を求め、龍の形に見えるだけじゃ。しかも竜でわなく龍。こんな事が出来るのなど……神だけじゃ」

神話に出てくる………竜でわなく、龍。 ツ!!!!!

「太古の昔、旧世界にこの世にたった一人だけ神が存在した、という記録がある」

「神だと……?」

「ああそつだらカン。魔法を含め、ありとあらゆる魔の根源とされた存在だ。そして、その神は三つの事象を司る神だったといわれる」

「三つの事象…それは?」

「武と破壊と………死の神だ」

そう、人間がどうこうできる存在じゃない……！！

その時、気付いた。

さっき迄そこにいた奴がない。

ちゃんと警戒していたはずだ！？

そう思った瞬間、

ザワツッ……！と、身体中が危険信号を拳がり、後ろから声か聞こえる。

へエ、わざわざ説明ご苦労様ア。

そこで私の意識は途絶えた。

s i d e o u t

何をされたか分からなかった。各々が最強クラスの名に恥じぬ強さを持っていた紅き翼が。

サムライマスターと呼ばれる青山詠春は瞬殺。

この事が、当時十数歳のナギを突き動かした。

「て、テメエ!!!」

「待つんじゃ！……ナギッ！」

不老で、メンバーの中で多い知識と経験を持つゼクトは、目の前にいる『モノ』が何なのか。その危険性を正しく理解していた。

「オオオオ！……！」

ナギは『ナニカ』に殴りかかるが、

トンッ、

突っ込んだ筈のナギの胸に、『ナニカ』は手を置き、呟いた。

「……………html第四ncgr波動petm」

カッ！

『燃える天空』と比べられない、極大な熱線がナギを包み、吹き飛ばした。

「ナギ！！チクショウッ！」

ラカン、自身の最も巨大な武器、斬艦剣で斬りかかる。

だが、『ナニカ』に近づいた途端、斬艦剣はバターの様に削り取られた。

「！！！！！！」

知っている。

これは、『完全魔法無力化能力』だ。

「……………カントクセ」

ラカンが理解したと同時に、ラカンは殴り飛ばされた。

カッ消されたと表記した方が正しいと思えるほどの威力だった。

空中に立った『ソレ』は右手から緑色の槍の様な炎を作り出した。

「雷霆rkmpw槍」

問題はソレに込められた魔力の量だった。

あり得ない。

この世に現存しているどのような存在を愕然、呆然させる程の魔力で作られた槍が、投撃される。

ゼクトの『クラティスデー・アイギス最強防護』は、紙切れの様に破られ、その戦場を消し飛ばした。

勝敗、などという話ではなかった。

s i d e レン

一応、親父殿には勝利したんだが……。あれは勝負になってたか？

残りは、龍眼で観て、屑以外は生かした。連合の正義バカは論外だな。

『龍眼』は、物体、事象、存在。これ等全てを『観る』事が出来る。人の死や、未来さえも。まア精神力がないと発狂するが。

次はどうすっかなア……。そオだなア、アスナに会いに行くか。

龍眼で世界を観て、移動する。

その戦いは帝国の勝利に終わった

いや、正確には帝国側が生き残りった。が正しい。連合側は、ほぼ全滅。紅き翼は文字どおり蹴散らされた。

生き残った帝国軍はこの事を、体を震えてさせながら報告し、帝国の皇帝は戦慄した。

両軍ほぼ全滅。

全兵が全員死傷した訳ではない。その圧倒的な死の恐怖で戦意が、

戦場ごと殺し尽くされていた。

それを行ったのが、見た目5、6歳の少年だったという事も理由の一つだが、

500年前に、「神の再来」^{ザ・セカンド}と呼ばれた人物とその少年の特徴が合致しており、更に少年が放った死ノ恐怖が王宮、そして全世界迄届いていた事で皇帝を震え上がらせたのだ。

戦争を起こし、大勢の被害者を出した事による、神の罰か。はたまた世界の終わりの前兆か。真実を知る者は、その存在しか知らない。

その日から、世界はその少年の事を畏怖を込めて『^{インセイン}禁忌』と呼んだ。

死の恐怖（後書き）

アンケート途中経過ッ！！

千雨 九票

アキラ七票

真名六票

茶々丸二票

夕映二票

さよ二票

裕奈二票

楓一票

のどか一票

まき絵二票

先生陣四票

スゲエ、千雨さん一番人気ですね。

確定者は アスナ 木乃香 刹那 エヴァです。

アンケートや感想、こうしたら面白くね?という意見もどしどし募集します。

黄昏の姫御子（前書き）

ちよ~~~~短め。

黄昏の姫御子

黄昏の姫御子

s i d e レ ン

今日、俺はオスティア最深部に来ている。

何でんな所いるかというと。

「ダレ？」

アスナのどこに来てる。

にしてもマジ無表情だなアオイ。しかも鎖に縛られて、口元には血とは。

やった奴蒸発させるかア、物理的に。

「オマエ、名前は？」

アスナの血を拭き問う。

「アスナ、アスナ・ウェスペリーナ・テオタナシア・エンテオフュシア。アナタは？」

「俺はレンだ」

よし、まずは感情を取り戻すか。……………アスナが「レン……………」って呟いてる。これは大きな一歩なんじゃねエのか？

「レンはナニしにキタの？」

「人形みてエな奴をバカみてエに笑いさせに来ただけだ」

そう言つと不思議そうにしていた。

「みんなはワタシの力をコワがつてちかづこうとしないのに」

「……………魔法無力化か、ハッ」

俺はサギタ・マギ力を一発誘導させて自分にぶつけ、消す。

「……………ああ、俺もだ」

sideアスナ

目の前の少年の行動が解らない。

現れたらワタシを人扱いし、縛っていた鎖を壊してくれた。

何故？

他の人の様に、道具扱いや、怖がりもしない。

「ミンナはワタシの力をコワがってちかづこうとしないのに」

すると彼が笑い、魔法の射手を自分にぶつけ……………消え……………た？

すると、彼は苦笑しながら信じられない言葉を言った。

「……あア、俺もだ」

……え？ワタシと同じ……？

彼がワタシの頭を優しく撫でてくれる。

……暖かい。

解らない、分からない、判らない、ワカラナイ。

それでもワタシは嬉しくなった。何でだろ

ワタシは無意識にうなずいていた。

そうしたらレンは微笑みながら、ワタシの頭を撫でてくれた。

なんだか、胸がすごくぽかぽかしてきた。

ワタシが昔、なくしたものが戻ってくる気がする。

なんでだろ？

すると、誰かの足音が聴こえてきた。

「時間か……」

「行のちやうの？」

「まア、そオなんだがよ……オマエはどうすんだよ？」

ワタシ？……ワタシは……ワタシも一緒に……！

……でも、ワタシみたいのが一緒だったら……彼も嫌がるに決まってる……。

「…ハア、なんかデジャブってんな…」

そう言つと、彼はワタシの手を取って立ち上がらせてくれて、

「……………なにやってんだ、行くぜ」

「え………?」

「言ったるうが」

「……………笑わせに来たっつてよ」

ワタシを外に、連れ出してくれた。

黄昏の姫御子（後書き）

アンケート途中経過ッ！！！！

千雨 九票

真名八票

アキラ七票

楓三票

茶々丸二票

夕映二票

さよ二票

裕奈二票

のどか一票

まき絵二票

先生陣四票

確定者は アスナ 木乃香 刹那 エヴァです。

アンケートや感想、こうしたら面白くね？という意見もどしどし募集します。

女性のカン是世界一。(前書き)

ノクト)アチャ子はちゃんと出しますよ。いや、正確には出ています。これヒントッ！

レン)ヒントになってねエだろオがよ。ハッキリに言えよ、アリ』
アウトオオオ!!--!!』

女性のカン是世界一。

sideレン

今、俺はアスナと一緒に方舟の中にいる。

理由は単純、サーヴァントを安全に召喚する為だ。

『アイツ』から折角の残業手当を貰ったんだ、使わねえと頑張った甲斐がねえ。

一応セイバーがキャスターの、トップクラスの英霊のはずだ。

英霊は誰かを指定するつもりはねえ。まあ、アヴェンジャーが某ジャンヌ信者のクソ野郎以外なら基本構わねえ。

後は野となれ山となれだ。

因みに、アスナは寝ている。三徹してなかったんじゃないか？と思う程熟睡してる。

「……鎖せ鎖せ鎖せ……、英霊の座に在る、まだ見ぬ俺の使い魔！！間違った望みを抱いてよオが、取り返しの利かない罪を犯してよオが構わねエ！！その力の全てを俺に託してくれンなら、テメエに俺の命運を託してやる！」

「……来やがれ！！我が天秤の守り手よ！！！」

召喚の正しい詠唱なンぞ知らねエから、省いた。

さて、どんな奴が召喚出来たかねエ。

俺の目の前には……、

「は？」

……青いドレスに騎士甲冑を身につけ、綺麗

な金髪を持った少女。

青セイバーもとい、スタボロ虫の息状態の――、

――アルトリア・ペンドラゴンがいた――。

待て、落ち着け俺エ…。

サーヴァントを召喚出来たのはいい。まだ理解できる。

何故に血塗れエー!!？

勿論そんな状態で放置するのはアレだったから、フラグメントの『治癒』と『変身』、『一方通行』、更には『龍掌』を同時発動させ、治療している。

シュトローム風に云うならば、『閃華烈光拳』ってトコかア。

しているつつても、既に傷の修復は完了しており、俺のベッド（方舟の中の）に寝かせて、後は意識を回復すのを待ってる所だ。

ま、治療系の異能を総動員したんだ。それで『助かりませんでした。』じゃ済まさねエぞ。

「ん……………レン？」

「アスナか。悪い、起こしちまったか。」

隣のベッドで熟睡していたアスナが目覚める。

本当は部屋も別にしたかったんだが、全力で拒否られるとは思わなかった。

「その人は？」

「俺のサーヴァント、……の筈なんだがなア」

「サーヴァント？」

「特別な従者兼使い魔みてエなモンだ。」

「そう……」

長門有希みてエな反応だなオイ。

にしても、……まさかアーサー王が出てくるとはなア。

『……間違った望みを抱いてよオが、取り返しの利かない罪を犯してよオが構わねエ！！！』

……絶対アレが原因だなア。

しかし、彼女は協力してくれんのかねエ？ここには願望機は無い。有ったとしても、あんなフザけた願いを叶えさせる気もサラサラ無い。

……さアて、どオすツかなア。

「……う……ん、私は……」

どオやら、王サマはお目覚めの様だ。

「よオ、目エ覚めか」

「……は……？」

少々虚ろだが、意識的はあるな。

体は『一方通行』で触れていれば検査はできる。無論、問題なんてねエ。

「あー、『魔法世界』と呼ばれる火星に位置する異世界だ。ちなみにここは俺のアジト。ぶっちゃけ並行世界だ」

「わたしは……死にかけていた……いや、死んだはず」

ホントな、お陰でとんだバカ面晒しちまった。

俺にとっては虫の息でも、他の医者なら投げ出してただろオからなア。

死んだら死んだで『反魂』で生き返らせるが。

反魂は死体が腐敗してよオが、大体一ヶ月以内なら蘇生可能だがなア。

無闇やたらと使いたくねエがなア。

「貴方は？」

「レンだ。オマエを召喚したマスターの筈だが？」

右手の令呪をみせる。

「そうですか……。しかし、私の記憶は所々が混乱しています。おそらく……」

「チカラ技召喚だったから、不具合が生じちゃったかもな。パスもスタスタだろ」

「ええ、不確定なパスで魔力が途切れ送られてません」

うつわ、マジ衛宮くん状態。

ま、魔力パスぐれエ、仮契約でどうとでもなンだろ。

誤解が生まれそうだから訂正入れとくが、血による仮契約だ。

キスなンぎ、やらかしちまったらエクスカリバーで真っ二つにされちまうわ。

見た目14歳でも、精神年齢100越えてンだぞ。

エヴァ思い出すわ。

つか、仕事始めてから肉体と実年齢が合ってる仲間がいねエ……………

エヴァ、アスナ、アルトリア、俺。

年齢不詳にも程がある。

「ムッ、何か失礼な事を言われた気が……………」

その直感Aは、絶対ギャグ補正はいつてるよな！

「激しく同意。」

ブルータス（アスナ）！！オマエもかアアアアッ！！！！

「…………ハッ、何かレンに馬鹿にされた気が！？」

エヴァ
真祖のスペックは廃が付く。

女性のカン是世界一。(後書き)

千雨 十票

真名九票

アキラ八票

楓四票

茶々丸二票

夕映二票

さよ二票

裕奈二票

のどか二票

まき絵二票

先生陣五票

(。。。) 千雨パネエ……。

確定者は アスナ 木乃香 刹那 エヴァ。

アリア、アルトリアも入れるか迷ってます。

アンケート待ってます!!

対面（前書き）

アルトリアのヒロイン化が決定しました!!!

対面

side 三人称

「丁度あんの親父^{アホ}は、母さんと会ってる頃だろ」

アルトリアを召喚して数ヶ月経った。

アルトリアの仮契約は後回しにし、まず受肉させてからにする事に決めた。

受肉方法は、もう色々有って忘れていたがレンの体は『アダム』なのだ。つまりは神の現人^{うつせみ}であり、キリスト以上の『救世主^{メシア}』なのである。

つまり、レンは『摂理代行者』としての価値と、神の肉体としての価値があり。おそらくその肉体の価値は、『使徒^{アポストロフ}』に同等以上。

その肉体の一部を媒体として使えば、英霊一人の受肉など容易い。
結果、

――ぶっちゃけ俺の血イ飲ましたらいけんだろ。

という方法を摂ることにした。

キャスタークラスの魔術師が居れば、こんな適当案を出さなかった
が、生憎レンに魔術知識は無い。

仮にメディアがレンの存在を知ったら、卒倒間違い無しだ。

「レン」

レンの側にいるアスナが常にいる。そのレンに付いてくる姿は、仲
のいい兄と妹に見える。

服装は、長年着ていた儀式服ではなく、普通の女の子のそれにして
いる。

そんなアスナを、体感時間で50年ほど会っていないエリアに重ねてしまうのは、しょうがないのではないのか。

レン達は、紛争地域や戦争で傷付いた人々を治したり。また、連合による理不尽な襲撃に会いそうな村々を回っている。

レンは、まるで何時ものようにと言わんばかりの手付きで、怪我人達を片っ端から治していた。

レンの治療法は二つに分かれている。

体の一部が欠けていない傷に対しては『龍掌』を使う。

龍掌は、対象者の気、魔力を使い自己治癒能力を限界まで強化し、治す。

端から見たら、ただ殴っただけで傷が消えている様に見えるだろう。

体に欠損がある場合は、『変身』か『治癒』の欠片を使い再生させ

る。

龍掌と違い、レン自身に負担はあるが、全人類を一から造り出したとしてもレンにとって『負担』にはならない。

しかも、それは人間に対してのみで、魔法世界人は『リライト』で事足りる。

下らない正義を掲げ、自分の行為は正しいと思い込んでいる愚者に対しては、圧倒的な力で尻を叩く（余りの馬鹿さ加減にキレ、半凄王化）。

そんなの姿に、アルトリアは思わず見惚れ、時が経つにつれ興味を持った。

何故この人は、これほどの力を持ちながら、自分の欲の為ではなく、人々の為に振るえるのか？

アルトリアが聞いてみたら、

「――ただの自己満足だ。意味なんてね」

（フフツ、不器用な人ですね）

アルトリアはまだ、レンに惹かれ始めている事に気付いていなかった。

「そおだ、アスナ、アルトリア。遊びにでも行くか？」

「うん」

『はい、構いませんよ』

だからアルトリアは迷ってしまう。

自分はこんな幸せな日々を送っていて、良いのだろうか……。

「これ何？」

「アイスクリームつつウンだよ。食べるか？」

「うん」

「……………平和、ですね」

「だな。仮初めの平和でもイイモンだな」

レンとアスナは、行き掛けに紛争地域と災害地域を鎮圧し、復興させてメガロメセンブリアの下町に着いた。

実体化したアルトリアもいる。

アルトリアの服は、第四次聖杯戦争で着ていた黒スーツだ。

まだ魔力パスは完全に繋がっていないため、最強クラスとは1・2回しか戦えないだろうが。

グレートグラマターキー
『最後の鍵』で転移すれば、もっと早く着いたが、態々そんな回り道をしたのは、アルトリアとアスナに魔法世界の現状を見て欲しかったからだ。

「……………」

「記憶、戻りそオカ？」

「…はい」

どうやら、この数ヶ月で、何か記憶を取り戻しつつあるようだ。

（少し沈んでんな。まアシアねエだろ、あんな人生じゃア）

アーサー王は、最も有名な悲劇の王だ。

他国に滅ぼされたのではなく、自国に滅ぼされた。

14歳の少女が国の為に身を捧げたというのに、捧げた国に敵対され、最後には自分の息子に殺された。

その記憶を取り戻すのは苦痛だろう。

最高の騎士と呼ばれた、あのサー・ランスロットがバーサーカーになるのだ。

相当なものだろう。

だから、アルトリアは聖杯に願ったのだ。

やり直しを。

「果たしてその願い先に、オマエの幸せは在ンのかねエ」

『?』

「戯れ言だよ」

無理矢理の話題転換により、話を終わらす。

ソフトクリームを食べ終わり、いくつか服を買って、また街を歩いている。

まだ昼過ぎで賑わっているが、そろそろレンは帰ろうとしたら。

「……!つと。」

「うおっ、悪イ!」

大量に荷物を抱えた人にぶつかる。

（つか、相手側の顔が見えねェんだが。フード被ってるのもあるが、持ってる荷物が矢鱈多いなオイ）

反射をデフォで設定している為、向こうは結構痛いはずだが、平気のようだ。

実際余り大した力でもなかったのもある。

「馬鹿者！人とぶつかる奴があるか！！」

「ハア！？誰の荷物のせいだとおもブツ！？」

男の連れが、レンがかつて見た事が無い綺麗なビンタを決めた。

その影響で、二人のフードが脱げる。

「……………何イチャついてんだ、ツンデレ女王に
あんちょ」

「！？」

「……………何者じゃ。そしてツンデレとは何じゃ」

「そしてイチャついてねえ！」

二人……………、ナギ「スプリングフィールドと、

アリカ・アナルキア・エンテオフュシアは身構え、警戒する。

対面（後書き）

アンケート途中結果ッ。

千雨 十三票

真名十一票

アキラ九票

楓五票

茶々丸五票

さよ五票

夕映二票

裕奈二票

のどか二票

まき絵二票

先生陣六票

確定者は アスナ、木乃香、刹那、エヴァ、アルトリアです。

アリアはまだ思案中なので、アンケート待ってます。

ちなみにヒロインアンケートは、主人公が現代に帰る迄とします。

接触

side 三人称

一触即発。

レンの前にアルトリアが立ち、服は変わっていないが間違いなく不可視の剣をナギに向けている。

ナギもアリカを守る様に前に立つ。

「……………」

「……………セイバー、切っ先下げろ。」

「……………判りました」

アルトリアが切っ先を下げても、状況が変わるわけでもなし。

緊迫した空気の中、レンが話を切り出そうとした時、

「ナギ」

「姫子ちゃん?!」

「アスナ!?!」

そこに爆弾^{アスナ}が投入された。

アスナは片手にアイスクリームを持ち、食べている。

「オラ、物食ってる時は喋ったらダメッつってンだろうが。行儀悪い」

「ゴメン」

「……………数カ月前、アスナが誘拐されたと聞いたが……………まさか、お主が?」

アリカがレンを睨む。

睨まれるのは当たり前だが、レンとしてみれば、母親にそんな視線を向けられて、いい気分ではないだろう。

しかし、そんな視線を遮る様に、アスナが立つ。

「姫子ちゃん……？」

「違う」

「！？」

アリカは、アスナから聞いたことがないぐらい力が籠った声に驚愕する。

「レ…ブレイドが無理矢理私を連れて行ったんじゃない。私がブレイドに付いていったの」

「だからブレイドにそんな眼を向けないで。」

「……ッ!!!!」

アリカが顔を悲痛に歪める。

おそらく罪悪感からだろう。

「（……滅茶苦茶饒舌に喋ってんなア）」

「（無論です。数ヶ月とはいえ、私が教育したのですから。元々、飲み込みが早かったですし）」

「（流石騎士王サマ。帝王学とか無敵じゃねエの?）」

念話でそんな会話をしていると、ナギがレンを見て気付く。

「お前……まさか、『^{インゼイン}禁忌』か!?!」

「何じゃと!!?」

その二つ名を聞き、レンが頭を抱える。

「……なんだその厨二感溢れる二つ名ッぱいのは? まあ多分俺なんだろオが」

「厨二?」

「オマエにやまだ早エよ、アスナ」

「わかった」

ナギは今だに警戒しているのか、分かりやすいくらいに魔力を昂らせている。

「……………ナギ、勝てるか?」

「無理だ。皆が居た奇襲でも手も足も出なかったからな。」

警戒するのも当然だろう。敵意が無いからか、次元が違いすぎるのか。アリカにはナギの感じている絶大な圧力を感じない。

「…ヘエ、力ばかりのアホだとばかり思ってたんだが。存外、まともな神経もあるんだな。見直したよ。」

一対億でも愚の骨頂。

一対一など正気を疑う。

全新旧人類が相手をして、レンにとって物の数ではない。

更にそこに世界最強の剣が加わるのだ。

万に一つも勝機は、生存率は無い。

「……黄昏の姫御子を返して貰えぬか」

「フザケンな。連れ戻してどうする？また兵器扱いして鎖に繋げんのか？」

レンの言葉に微量な怒気が含まれる。

アリカでなく、元老院が言った言葉なら最低の死は確定だ。

「……ならば、諦めるしかない。紅き翼でも勝てるのであれば、今戦っても意味は無い。それより、『完全なる世界』を倒す為に、戦争を止める為に手を貸してはくれぬか？」

「オイ、姫さん！」

「黙っている。……主の力量は大体分かる。あの大規模戦闘を一人で止めたほどじゃ。その力、この戦争を止める為に貸してくれ」

おそらくレンは『コスモエンテレケイア完全なる世界』の事も知っていると、アリカは判断した。

「…………ハッ、戦争、を止める為ねエ。」

レンは一瞬、呆れたような顔をして、鼻で笑う。

「何が可笑しいのじゃ」

「笑いたくもなるわ。戦争を長引かせた奴が、戦争を止めたいと努力する奴と一緒にいるとはな。」

「……………何じゃと？」

「アンタさア、『紅き翼^{コイッラ}』のせいで戦争が長引いたって事を分かってねエのかよ」

「なんだと!？」

レンの言葉に、流石にナギも聞き逃せなかった。

当たり前だろう、自分達が遣ったことが全否定されたのだから。

「そオだろオが。オマエ等紅き翼がいなけりや帝国は勝ち、戦争は終わってた、違つか？」

「なっ！？そんな事をすれば、連合は滅びていたじゃねエか！」

「イイじゃねエか。オスティアを除き、元々魔法世界は亜人たちのものだった。そこに土足で上がり込んできたのは旧世界人だ。」

「それを、我が物顔で亜人達から資源を搾取する馬鹿がどうなるオメガロメセンフリアが知ったこっちゃねエ。本気で戦争を止めたかったんなら、元老院と帝国上層部のクズ共黙らせて、和平案でもさっさと出すこつたな」

「なっ！？」

ナギが驚愕し、アリカが苦虫を噛んだ顔になる。

ナギに反論など出来ない。

そして何より、レンが言っている事は、全て事実なのだから。

元々力試し程度の理由で参戦したのだ。そんな事を考えてる訳がない。

所詮まだ子供だ。

「戦争ってのは悲劇しか生まねエ。それはオマエでも何も変わらねエ」

「ナギ・スプリングフィールド。オマエは知ってんのか？」

自分の父親だからこそ、その軽率さが赦せない。

「力試しとか、テメエがふざけた理由で参戦し、戦争を長期化して、それが原因でどれだけの戦災孤児がいるのか」

「なっ……」

「知るこつたな。自分の作った悲劇の数を」

呆然とするナギを尻目に、レンはアリカに視線を向ける。

「アリカ王女、『完全なる世界』を潰すのはいいが、別の側面から調べた方がいい。」

「…別の方面…？どついう意味じゃ？」

「奴らがどうやって世界を終わらせるのかじゃアなく、何で世界を終わらせようとしてんのかを……」

……ドオン！……！！

言い終える前に、どこから魔法による攻撃が放たれた。

爆炎と爆風が一帯を包む。

しかし、中から出てきたのは、アリカ王女とアスナを護ったレンだった。

レンは、自身の魔法無力化の能力効果範囲を障壁の様に広げる事で、二人を守った。

それ以前にアルトリアが魔法を斬ったおかげで、その威力は極小になった。

ナギは範囲外だったが、自分の障壁で防いだのだろう。

「人が話してる最中にチャチャ入れて来るたア…………潰されてエのか？」

レンの眼が、絶大な殺意と共に、龍眼に変わる。

「私が行きましょうか？」

「…………いや、一撃喰らわしたらおいとまする。…………ナギ・スプリングフィールドオ！」

「！」

「あんな言い方したが、アレはオマエだけじゃなく、元老院や、帝
国上層部、『完全なる世界』にも該当する。」

全てが全て、ナギのせいではない。責任は戦争に加担した者全てに
あるのだから。

レンはただ、自分の行動に責任を持って欲しいだけなのだ。

「アリカ王女、アンタにはコレを渡しておく」

「っ！コレは？」

レンは、アリカにスーバーボール程の宝石を投げ渡した。

「ソイツは、王家の魔力に反応して俺に知らせる。もしアンタが幽
閉されたり誘拐されたら魔力を込めろ。それくらいの小事なら助け
てやる」

「そうか……………有難う」

「ッ！……どオいたしまして……」

表情が見えないように俯いて、レンは拳を地面につけて、炎熱系最強の欠片を使う。

アルトリアは、レンがアリカに礼を言われた時、嬉しそうな表情を作ったのを見逃さなかった。

「
- - - - -」
『伝導、アグニッシュ・ワッタス炎神の息吹』
」

ビキビキッ！！と、赤い光の亀裂が、龍眼で補足した敵に真っ直ぐ向かっていく。

瞬間、街の中からあらゆる物体を一瞬で蒸発する巨大な火柱が上がる。

ゴオオオオオアアアア！！！！！

「クッ……何だ、今のは！？魔力を全く感じなかったぞ！」

余波の突風が消えた時には、レン達の姿は消えていた。

「間違いない。あれは確かに黄昏の姫巫女。フフッ、見付けるのに苦労したよ」

レン達の姿を遠くから観ていた人形の事も、レンとアルトリアは見逃さなかった。

接触（後書き）

真名十五票

千雨 十二票

アキラ十票

さよ六票

楓五票

茶々丸六票

夕映二票

裕奈二票

のどか二票

まき絵二票

先生陣七票

真名嬢が千雨嬢を越えたアアアア！！！！

アリアも人気なので、今の所はヒロインにします。

確定者は アスナ、木乃香、刹那、エヴァ、アルトリア、アリアです。

アンケート待ってます！

アルトリア・ペンドラゴン（前書き）

アルトリアの回。ご都合入ってますんが、勘弁してください。

ただ、一言。

どうしてこうなったッ！！？

アルトリア・ペンドラゴン

side 三人称

『……これで良かったのか?』

「ああ、態々悪いな」

レン達は、最早日課になりつつある紛争地帯の鎮圧、及び怪我人の治療を行なった。今はその後だ。

「……レン、誰と話していたのですか?」

「アルトリアか、その内判らァ。オマエこそ……」

どうしたと問いたかったが、用件などアルトリアの表情を見れば分かる。

「……記憶が完全に戻ったか?アーサー王」

「…貴方は本当に全て知っていたのですね……私の願いを」

「自分の存在の削除。選定のやり直し………か？」

アルトリアは目を閉じ、頷いた。

「……確かに、俺にはそれが出来ない訳じゃアねエ。時間を跳ンで、オマエにカリバーンを抜かせなかったらイイだけだからな」

「！だとしたら……」だが、俺はそんな事は絶対にする気は無エ」
「…な、何故ですか！？」

「そんな事に何の意味があるんだ？」

「なっ………！？」

アルトリアは絶句する。

自分の人生も、

願いを、

想いを、

全てを知り、それでも尚、レンはその願いを否定した。

「一つ聞くが、ブリテンの王。オマエはその願いが何を意味してなのか、わかってんのか？」

「選定をやり直す事で、滅びの道の回避できるのです！！！私が王にならなければ！ランスロットも死なず、ギネヴィアも不幸になることも……ッ！！」

苦悩と苦情に、アルトリアは顔を歪める。涙すら浮かべる程に。

……だからこそ、レンは告げる。

その願いは間違っていると。

「確かにオマエがやり直しを叶えれば、ブリテンはまた別の行く末に行く事になっていたんだろうなア」

「でしたら……」

「今いる、オマエの国の血を引く全ての人間を消し去ってな」

「なっ……」

もしアルトリアが、やり直しを遂げれば、アルトリアが死んだ後も生き残った人間を。

その子孫を、その生きざま全て『無かった事』にされてしまう。

全ての努力を、想いを、価値を、全て無かった事になってしまう。

「何より……」

「オマエと一緒に戦った騎士や、オマエが守った国民の子孫は今、

この時代に国がなくなったことで不幸になってンか？そして、オマエに今も助けを求めてンのか？」

レンの言葉を聞いた瞬間。

アルトリアの願いの根本が、支えが、確実に壊れた。

レンは、『ゲート・オブ・バビロン王の財宝』から、一本の剣を抜き取る。

「『アロンドライト無毀なる湖光』！？」

「抜け、アーサー王」

レンはアルトリアに、最高の騎士の剣を向ける。

「！！！」

それに対し、最早条件反射になっている動きで、鎧を換装して構える。

上段から、レンは『アロンドイト無毀なる湖光』を振り下ろし、レンの剣圧で、アルトリアの体は弾かれる。

「ぐっ……！」

一瞬でアルトリアの目の前に移動したレンに、体勢を立て直して、アルトリアは剣を振るった。

レンは、それを『アロンドイト無毀なる湖光』で受け止めず、軸とし、アルトリアの剣を振り切らせた。

それにより、アルトリアの懐がガラ空きになったが、

「インレジブユア風王結界……！」

それに対して、剣を不可視にしていた風を解放して、自分を浮き上がらせることで回避した。

本当なら相手を吹き飛ばすのだが、レンに風速200メートル以下の風など当てた所で、剣圧で相殺されてしまう。

「……………ならばッ」

インビジブル・エア

風王結界で上に翔んだアルトリアがレンを両断するように振り上げ、

「ならば私は、どうすれば良かったのですか!!?」

解き放たれた黄金の剣を振るう。

受け止めたレンの足元が陥没する程の力だったが、
『アロンドイト 無毀なる湖光』
はビクともしない。

「他に……私は、彼らにどう償えば良いのですか
……………」

アルトリアの剣には力が入って無く、膝をついた。

もう、そこには王はいなかった。

ただ一人の、選定の剣を抜いただけの少女だった。

だが、

「へ……？」

「……な、何で……そんな、『ハア、漸くかア』みたいな顔をしてるんですか！／＼／」

「安心したからだ」

「え……」

「俺はその答えは教えてやれねエし、分からねエ。ただし、自己犠牲で償うなンざ言い出したら、もっペン頭ア叩いて分からせてやるだけだ」

自分には、安易な答えしか言えない。

「オマエは死ぬまで、死んだ後も、王であり続けたンだ。オマエは守ったンだろ。自分が辛くても、苦しくても、王であり続けたンだろが。」

「う……………ああ……………」

「顔を上げるよ、前を見る。王の責務を十二分に果たしたオマエに、俯いてる理由なンぞ、ねエンだからよ」

アルトリアの涙が溢れて、地面を濡らす。

その時、『アロンドイト無毀なる湖光』が光の粒子に変わり、アルトリアに入っていた。

「これは……………」

まるで、何かを伝える様に。

「あ…っ」

アルトリアが抱えていた重みは、嘘の様に消え去っていた。

だから理解出来た。先程の『アロンドイト無毀なる湖光』の意味を。

あれはで想いであり、願いだった。

数々の想いが交錯し、小さな言葉は表せられず、ただ一言が刻まれていた。

『――私達の誇りを、貴女に仕える事ができたと言う誉をお守りください』

「う……ああ……く……っ……！」

ただ、完璧な王で在ろうとした少女は、

「うああああああああああ……！！……！！」

- - - 少年の胸の中で泣き叫びながら、

漸く、長い責務を果たしたのだった - - -。

アルトリア・ペンドラゴン（後書き）

真名十五票

千雨 十五票

アキラ十二票

先生陣九票

さよ七票

楓六票

茶々丸八票

夕映二票

裕奈二票

のどか三票

まき絵二票

千鶴一票

古一票

千雨嬢がトップと再び並びましたね。

確定者は アスナ、木乃香、刹那、エヴァ、アルトリア、アリアです。

メインヒロイン最大10人でいきます。

ちと多いかと思いますが、色々な意見とアンケート待ってます。

人形（前書き）

アーウェルンクス、フルボッコ回。

アルトリア出てこねえ――。

人形

sideレン

泣き疲れたのか、アルトリアは眠りについた。

方舟の中のベットに寝かせたから外敵が来ることもない。

「まったく、無理しやがって……」

あの『アロンドイト無毀なる湖光』は、円卓の騎士達の想いを『アイツ』が抽出し、構成したものだ。

アルトリアを王の責務から解放するには、俺がどうこう言っただけでなるとかなる訳じゃアねエからなア。

「レン」

アスナが部屋に入ってきた。アスナのベットは隣だから当然か。

例の如くアルトリアも、護衛の為にとか言っただけで同じ部屋にベット突っ込んできやがった。

「どオした。アスナ？」

「アルトリアどうしたの？」

心配で来たのか。アスナも随分懐いてたからな。

レンには異常な程懐いてます。

「泣き疲れたンだよ。人間つつーのは、誰しも泣きたい時ぐれエある」

「そう…私も泣けるかな？」

「当たり前だ。オマエに薬が投薬されてた効果時間がある状況で、それだけ感情があれば上出来だろ」

そオだ、人なンだ。

王だろうと何だろうと、この世界に完璧な人間なンざいねエ。

誰だってミス位はするし、失敗や間違った事もするだろオ。

重要なのはソコからどうするかだ。

オマエはどうする？アルトリア

「……消すの忘れてたか」

「どうしたの？」

「ちと忘れ事があつたみてエだ」

「忘れ事？」

「あア……」

……ヒッキーの人形を、叩き潰しになア

side三人称

其処には、とある少女を追っていた人形がいた。

レン達は、方舟に入る際必ず自分達を透明化する。

つまり、分かりやすく現状を説明すれば、

「見失ったか……。いや、あれは消えたが正しいかな。転移の形跡

も見付からないとはね。」

カッソ。

アーウェルンクスシリーズ、一番目は其処にいた。^{ブリームム}

理由は勿論、黄昏の姫御子の奪取。

その黄昏の姫御子が、あの『^{イノセイン}禁忌』の下にいと判ったのだ。

カッソ。

「これはデュナミスに怒られそうだね」

より早く、黄昏の姫御子を回収しておけば、と後悔する。

自分の主である造物主が、^{ライフメーカー}異様な迄に警戒していた『^{イノセイン}禁忌』。

彼は、戦場に立ったのは一度きり。

立つた戦場まるごと消された。奇跡的に生き残った、……いや、生かされた兵士達は恐怖のあまり、この戦争中は戦線復帰は不可能になった。

カッソ。

その後、彼は紛争地域などの復興に着手し始めた。

助けられた村人の話では、魔法を一切使わずに、まるで奇跡の様に傷を癒し。水などを自在に生み出し、紛争地域では誰も殺さず鎮圧した。

彼は600年前にも出現し、同じ事をしている。

カッソ。

メガロメセンブリアからは『闇の福音』。帝国や、アリアドネーからは『金文の賢者』と呼ばれるエヴァンジェリン・A・K・マクダウェルの師だったとおぼしき人物。

何故、黄昏の姫御子を連れているかは知らないが、このままでは計画に重大な支障が出てくる。

カッン。

「！」

そこで一番目は漸く、足音に気付き、振り向いた。

其処にいたのは5・6歳の少年。^{フリームム}一番目は、その少年を知っている。

「『^{イノセイン}禁忌』……、君の方から来てくれるとはね」

またソレか、と、少年は心底つまらないと言いたげな表情をした。

「どオセ目的はアスナなんだろオが」

「そう、黄昏の姫御子を渡してくれないか？」

「もし俺がそれで渡すと思ってんなら、『アーウェルンクスシリーズ』ってのは、幸せ回路で溢れてるみてエだな」

六歳の少年とは思えない言動。当然といえば当然だが、不老者が何かだろう。

「やはり君は600年前の『^{ザ・セカント}神の再来』で間違いないようだね。改めて驚くよ」

そんなもの迄出来てたか。と、レンは内心頭を抱えているが、一番^{フリー}目にはそんな事は分からないし、分からせない。

「黄昏の姫御子は、僕達の計画の文字通り”鍵”なんだよ。君もこの世界の現状が解れば気が変わるかも知れないけどね」

「^{リフtright}世界再編魔法発動の為に始祖アマテルの直系で、^{マジック・キャン}魔法無力能力者^{セラ}」が必要なのは解るが、態々世界再編魔法使う必要あんのかねエ？」

人形のように、いや人形なのだが、感情が一切変化しなかった一番目の表情に初めて驚愕が現れる。

普通、自分達の計画の全貌を暴露^{バラ}されたも同然なのだから、驚きもする。

「……………どうやら、君を生かして帰す訳にはいかなかったようだね」

^{フリームム}
一番目は跳躍し、『冥府の石柱』をレンに放つ。

「……………一ぺん出来るか試したかったンだが、丁度イイか。――――
――『^{コード・オフ・ザ・ライフメーカー}造物主の掟』、再構成」

「なッ！！！！！！！？」

レンは、『^{グレートグラウンド・マスターキー}最後の鍵』を取り出し、”変型”させる。

ソレは、形を鍵から”槍”に変えた。

その槍が、インドの叙事詩『マハーバーラタ』の不死身の英雄の宝具に酷似している事など、^{フリームム}一番目には知るよしも無かった。

「トメイ・アルカイスアナルキアース
『無極而太極斬』」

その槍を振るった瞬間、石柱は空間が歪む様に消えていった。

「バカなッ……グレートグラウンド・マスターキー
『最後の鍵』！？あり得ない…それでは彼も…
」

「余所見たア、余裕だなアオイ」

レンが、プリムム一番目の後ろに回り込む。

『速』フラグメントの欠片に、最強クラスの身体速度が加わっているのだ。

いかに『雷天双壮』でも知覚出来ない。

「『^{パワー}力』の欠片^{フラグメント}……発動」

「しまっ……『惑星砕き』!!」

拳が命中した後、0.00001^{セコンド}秒で地面に着弾する。

「が……、はッ……」

一番目の体^{プリムム}に、核をギリギリ傷つけない大穴が空いている。

何故レンが、リライトで瞬殺しなかったのは理由がある。

一度完全に起動したアーウェルクスシリーズは、造物主が健在ならば短時間で創りなおせる。

最大の理由は、アーウェルクスシリーズの性能を完全に把握する為である。

「……っつーかよオ。町中からずっと付けてきたから、よっぽど性能が高エかと思って来てみたって言うのによオ」

「ハア……ぐ……」

「ンだア？ このバカみたいな三下はア」

凄王化も無しでコレとは、と、拍子抜けの表情であった。

「……化物……だね。主が……あれ程、危険視する……訳だ」

レンが持っていた槍は、鍵に姿を戻していた。

「テメエのご主人サマに伝える。世界再編魔法は諦めろ、とな。
リロケート」
□

ブリームム
一番目は強制転移され、レンは方舟に向かった。

人形（後書き）

千雨 十七票

真名十五票

アキラ十三票

茶々丸十票

先生陣十票

楓八票

さよ七票

のどか五票

まき絵三票

千鶴三票

夕映二票

裕奈二票

古二票

確定者は アスナ、木乃香、刹那、エヴァ、アルトリア、アリアです。

夜の迷宮（前書き）

すみません。前話の本文が、後書きになっていたミスがありました
が、訂正しました。

今回はアルトリアとアスナのキャラが崩壊します。

夜の迷宮

side 三人称

「レン、ここは何処？」

「ああ、お姫サマが捕まったらしくてなあ。前にやった宝石使ったんで助けにな。土地名は忘れた」

そう、今レン達はアリカ王女が監禁されている『夜の迷宮』に着いた。

ヘラス帝国第三皇女と秘密裏に接触し、『完全なる世界』について今後どうするか考える会議の途中、『完全なる世界』に誘拐、幽閉されたのだ。

紅き翼は、『完全なる世界』に見事嵌められ、指名手配になった。

おそらく此処を目指しているだろう。

無論、警備はいるが、アルトリアとレンがいれば、殲滅は容易い。

「レン」

「ああ？」

アスナはアルトリアとレンの教育により、とても人間らしい感情を取り戻しはじめている。

何より、自分に心を与えたレンとアルトリアに感謝している。

故に、

「アルトリアが変」

「ビクッ／＼／」

アルトリアの異変が気になった。

アスナの一言で、アルトリアが面白いくらい分かりやすい反応をした。

頬は紅潮し、戦いの時や何時もの凜々しい顔は見る影も無い。

「大丈夫かア？アルト」

「あ、ああハイッ！？／＼だただ大丈夫です！／＼」

「ああ、了才解。大丈夫じゃねエ事が分かった」

あの一件以来、レンと近くに居れば居るほどこの症状（笑）は顕著に出ている。ちなみに、アルトというのは「文字数がウゼエ」というレンのメタ発言による物。

ただ、アルトリアはレン以外に呼ばせる気は更々無く、レンに呼ばれるたびに嬉々としている。

「何この可愛い生物」

「寧ろオマエがどオしたアスナ」

「こつ、主人に甘えたいけど恥ずかしくてもどかしがってるペット
みたくて」

「な、何を言ってるんですかアスナ!!? / / /」

「具体的には、レンが寝てたベッドにダイブしてレンの枕を顔で埋
めてクンク「いやああああああああああああああああああああ
ああああああ!! / / / / / / /」

逃げ出した。

正解には、夜の迷宮に突撃した。

その勢いは恐ろしく、あつという間に夜の迷宮を警備していた『完
全なる世界』の下っ端を蹴散らして行く。

顔を茹で蛸のように真っ赤に染めながら、敵を斬る様は中々にシ
ュールである。

「アスナ、オマエ狙って言ったる」

「うん、確信犯」

「チツ、どいつもコイツもキャラがブレてやがる。こんな教育したっけかア？」

アスナの変な知識は、紛争地域のおばちゃんの賜物である事を、レンは知らない。

アルトリアの殲滅が終わった様なので、二人はアルトリアの所に向かう。

「違うんです違うんです違うんです違うんです違うんです違うんです
違うんです違うんです違うんです違うんです違うんです違うんです
違うんです違うんです違うんです違うんです違うんです違うんです
違うんです違うんです違うんです違うんです違うんです違うんです
違うんです違うんです違うんです違うんです違うんです違うんです
うんです違うんです違うんです違うんです違うんです違うんです
／／／／／」

「.....アスナア」

「……………やり過ぎた」

アルトリアは顔を押さええてうずくまり、うわごとのように連呼しまくっている。

地獄の丘の上で。

「カミングアウトが駄目だったなア」

「ゴメンアルトリア。今日のエビフライ一個あげる」

「れ、レン?! 違いますよ!! あれはアスナの只の冗談であって…
…イヤでもエビフライ……」

「
まア、知ってたがなア」

「よオクーデレ王女オ、助けに来たぜエ」

「早いな、そなたがくれたコレを使ってまだ十分も経っておらぬが……クーデレとは何じゃ？」

刈り取った壁の奥の部屋に、アリカと……ヘラス皇女を発見。開いた壁から、アスナが顔を出す。

「アリカ大丈夫？」

「すまん。元氣そうでなによりじゃ、アスナ」

嬉しそうな顔を見せるアリカ。まだアスナは笑う事が出来ない為、近くに寄ることしかアスナは出来ないが。

「紅き翼は……、丁度明けごろに着きそオだな。ちと早エが、飯でも食うかア」

「それは良い。是非そうしましょう」

「おお食事か！食べるぞ　！！」

アリカと一緒にいた少女が喜ぶ。

褐色で、綺麗な角が二本生えている。

「……………何だこのクソガキ」

「クソガキ！？妾は帝国第三皇女のテオドラじゃ！無礼じゃぞ！！」

「位なんざ興味ねェんだよ。俺に敬意を払わせたかったら、それだけ価値のある人間に成りやがれ」

「むう……………そ、そもそもお主らは誰じゃ！？」

「椅子並べンの手伝えアルト」

「ハイ」

「無視するな　！！！！」

「おお！もぐもぐ、お主等があの、もぐもぐ、『神の再来』ザ・セカンドなのじやんブファ！？」

「物食ってる時に喋ンじゃねエ、仮にも皇女だろうが。……………そオだよ」

口に物を入れてる再中、喋ったら誰であろうと鉄拳制裁。

コレがレンの食卓のルールである。

流石に正論である上、皇女という身分なので、反論が中々出来ない。

「それで聞きたかったのじゃが、600年前もお主が確認されておるが、同一人物なのか？」

「ああ、あん時はエヴァと一緒にだったかなア。今アイツどオしてンのかねエ？」

「何！？あの『金文の賢者』の師は、お主なのか！？」

「……その『金文の賢者』が誰かは知らねエが、エヴァンジェリン・A・K・マクダウエルは俺の弟子だ」

レンはエヴァとはアリアドネーで別れたきりなので、エヴァのその後を何も知らない。

誰かに認められた。

それだけで充分なのだ。

「……レンは一体いくつなのですか？」

「覚えてねエ。本来の時間軸に戻れば、肉体も成長すんだろオ」

「本来の時間軸？」

「また今度教えてやる、………来たみてエだな」

「姫さんッ!!」

予想より早く着いたが、紅き翼の到着である。

「遅かったなア、脳筋」

「テメエ等！やっぱ『完全なる世界』の手下だったカブツ!？」

「妾達を助けてくれた恩人に殴りかかるなバカモン!!」

到着早々誤解し、レンに殴り掛かるナギだが、アリカのビンタで沈められる。

「何回目ですか……」

「アスナ、アレには絶対なるなよ」

「
分
か
っ
た
」

夜の迷宮（後書き）

千雨 二十二票
真名十五票
アキラ十六票
茶々丸十五票
先生陣十一票
楓十票
さよ七票
のどか五票
まき絵三票
千鶴四票
夕映二票
裕奈二票
古三票

茶々丸票が急上昇し、千雨嬢がエライ事になってます。

キャストアンケートを取りましたが、友人から別作品のキャラにした方が良いとの指摘がありアンケートを中止する事になりました。

自分の身勝手に皆さまにご迷惑おかけした事、謝罪申し上げます。

ヒロインアンケートは引き続き募集中です。

確定者は アスナ、木乃香、刹那、エヴァ、アルトリア、アリアで
す。

重ね重ね、申し訳ありません。

騎士王と千の呪文の男（前書き）

ナギって、対剣士の場合どうやって戦うんだろう……？

騎士王と千の呪文の男

sideレン

紅き翼＋姫様方＋俺等で紅き翼の隠れ家（笑）のあるタルシス大陸
極西部オリンポス山にやって来た。

「じゃあ、コイツ等は姫さん達を助けに来た訳か」

「あの状況で何で気付かねェんだよ。やっぱり脳タマが著しく劣化して
ンのが原因かア。詠春……だっけか？リーダー変えた方がイイぜ」

一緒に食事をしている奴も敵にする思考、先走りの上、物事の視野
が狭エ。チームのリーダーとしては最悪だなア。

「最近本気で考えつつあるよ。ええと……ブレイドだったな、この
前はナギが世話になったようだな、有難う」

青山詠春が、頭を押さえながら返してくる。

言っちゃ悪イが、哀れ。

「オマエはアイツの母ちゃんかア？」

「ハハハ……」

笑いが乾いてンぞ。

「ブレイドよ」

「あ？」

アリカ嬢が話し掛けて来る。まア、大体は内容は予想出来るが。

「我等と共に来てはくれぬか？やはり我等には、お主が「しつけエぞ。俺は確かにオマエを助けたが、そこまでしてやる義理はねエ」……そうか」

俺の一言にアリカ嬢は黙る。そこに白髪頭のオッサン　ガトウが出てくる。

「しかし、君も分かっているのだろう。このままではこの世界は、『完全なる世界』に滅ぼされてしまう。そうなれば君も……」

「知ったような口訊いてンじゃねエよオッサン。俺は『完全なる世界』の思想や方法はともかく、”アイツ”の理念は嫌いじゃねエンだよ。」

「ハア！？世界滅ぼそうって奴のり…リネン？あああつ！わかんねえけど、嫌いじゃねエってどういう事だよ！！」

「俺はソレを調べるツつってンだよ馬鹿」

俺はそう言い終わると、踵を返す。

アスナの義理は通した。もう用は無い。

「なあ」

「あ？」

「お前、俺仲間になれ！」

……………コイツ、アリカ王女との会話聞いてたンじゃねエのか？

「ハア、ルフィ上等の台詞で悪イが、ソレはもオ断ったじゃねエか。ホント頭トンでンな」

「知るか！！行くなら俺を倒してから行けっのッ！」

ツたく。リロケートで転移すんのは簡単だが、ここでトンスラこいたらまた言い出しそうだしなア。

まア、問題はソコじゃねエ。

「……貴様如きの軍門に降れと……？戯言が過ぎるぞ。貴様、我がマスターを侮辱するつもりか」

「へっ？」

アルトが滅茶苦茶キレてるのが一番の問題だ。

馬鹿^{ナギ}が気の抜けた声を挙げる。

何も考えてなかったよオだなアこの馬鹿。

にしても……受肉には成功したンだが、パスはズタズタ。

未だ仮契約すらしてねエのに、何だこの忠節度は？

確かにライダーが同じ様な事を言った時も、キレた筈だが、これ程じゃなかったよなア。

「……………フウ、分かった。だったら力ずくだ。
蹴散らせ、
セイバー」

「了解しました、”マスター”」

side 三人称

アルトリアが、黒スーツから騎士甲冑に姿を変える。

勿論ナギが騒ぐが、そんなものでアルトリアは止まらない。

「ちよつ、何でアンタが出てくんだ！？俺はソイツに「私はマスターの剣、ならば私が戦わずして何が騎士だ。それとも、貴様はそんな事すら判らん愚者か？」

流石に、そこまで言われて引き下がる程、ナギは穏和でもなく、賢くもない。

「……………チツ、アンタには用はねえんだ。さつさと退いて貰うぜ！
マンマンテロテロ……………来れ、虚空の雷 薙ぎ払え
ディオス・デユコス
雷の斧』！……！」

ナギは詠唱が短い『雷の斧』をアルトリアに叩き付けるが、対魔力Aのアルトリアに、中の上の威力の魔法で傷をつけれる訳がなく。

紅き翼のメンバー（詠春以外）が何も言わないのは、ナギの行動を邪魔しても無駄だと分かっていたからだ。

「随分と言められたものだ……」

「無傷……嘘だろ？」

少し呆けたナギに、縮地（レンが教えた）でナギの懐に潜る。

「ヤバッ」

一閃。

ナギが避けたのは、ただの幸運だったろう。

だが、それで攻め手を緩めるアルトリアではない。

「これは……」

「スゲエ……」

「何者ですか彼女は…」

紅き翼の面々が、感嘆の息を漏らす。

嵐の様な、清流の様な、あらゆる面を兼ね備え、最強クラスの剣士であるラカンと詠春が見惚れる程の剣戟。

これが騎士王。

「ハアッ!!」

「ガッ!!?」

剣戟の嵐に耐えきれず、バランスが崩れたナギにの横っ腹にアルトリアの蹴りが入る。

アルトリアは、フツ飛ばしたナギの着地点に回り込む。

しかし、ナギも簡単にはやられない。

虚空瞬動で上に跳び、あんちょこを使用。

「百重千重と 重なりて 走れよ 稻妻

」

ナギが広域殲滅呪文の詠唱を始める。アルトリアはそれを見て、力
ードを切る。

「 詠春、ラカン。よく見とけ。そして刻み込め」

レンの声に、二人がハッとする。

今まで見えなかった不可視の剣が、姿を現す。

現れたのは黄金の聖剣。

アーサー王伝説の真骨頂にて、アルトリアの宝具。

その名は 。

「『^{エクス}約束された

」

「オラアッ！！『^{キーリブル・アストラベ}千の雷』！！！！」

「^{カリバー}勝利の剣』！！！！」

「アレが、世界最強の剣だ」

その一筋の光は、千の雷を軽々と呑み込み、

ゴッッ！！！！！！！！

オリンポス山の一角を根刮ぎ消し飛ばした。

「「「……うつわぁ」「」

「ナギの奴、死んだんじゃねェか」

「いや、生きてンよ」

クイツと、レンが指を引き寄せる様に曲げると、ズタボロのナギが煙から飛んで来る。

『サイコキネシス フラグメント
念動力』の欠片を使ったのだ。

飛んで来たナギにボディীবローを決め、龍掌でアルビレオが治療可能な状態まで治す。

「つー訳で、俺達に行く。精々足掻け、俺達も足掻く。」

「またね」、アリカ」

「ああ！お主達もな」

「リロケート」

こうして、レン達は紅き翼と別れた。

次に会う場所が、アスナを欠いて『墓守りの宮殿』とは知らずに。

騎士王と千の呪文の男（後書き）

千雨 二十二票

真名十九票

茶々丸十八票

アキラ十七票

先生陣十二票

楓十一票

さよ七票

のどか六票

まき絵三票

千鶴四票

夕映二票

裕奈二票

古三票

茶々丸がベスト3入りにッ！！

唐突ですが、アンケートを取ります。

このまま行くとサブヒロイン入りになる十票以上持つてる先生陣を誰にするのか。一度先生陣に票を入れた人でも投票してください。

それと、キャスターアンケートを再開します。

考えましたが、何故かどうしてもこいつもエヴァにキャラが被るので。

現在は

玉藻六票

メディア五票

まさかのスカサハ一票

前言撤回ばかりで、謝ってばかりで申し訳ありません。

確定者は アスナ、木乃香、刹那、エヴァ、アルトリア、アリアです。

感想やアンケート、待ってます！

想定外（前書き）

敵がチート級に……。。

想定外

side 三人称

そこはある民家の近く。

「嫌だ！！俺はハーレム帝国を創るんバアギャツ！？ギヤアアアアアア！！！」

「……ッたく。転生者つてのは、糞の掃き溜めしかいねエか？」

血の様な真つ赤な眼。何故か地面に引き摺らない、足元まである長い綺麗な白髪を首元で括っている少年。

「これで685匹目……この時代の転生者^{クス}は残り数匹程度か。ここまで多いとはなア」

目の前には何も無い。

少し影が地面に焼きついている以外は。

大戦期は、力を手に入れた転生者が力を試すのには格好の時代。

戦争中に、誰が誰を殺したなど調べようが無いからだ。

そんな転生者を殺して約700人。ハッキリ言って割に合わない仕事だと言いたげな表情を作る。

戦地を龍眼で観て蒸発させるだけなのだが。精神的に参ってしまいそうなのだ。

「はてさてエ、造物主^{ヒッキー}はどオするつもりかねエ？」

転生者を狩りながら、紛争or災害地域を復興&鎮圧しながら、元老院の『完全なる世界』との関与の証拠を集めまくっているレンは
呟く。

原作での最終決戦まで残り数日。にもかかわらず、計画の核である
アスナはレンの下にいる。

「そろそろ来んだろうがなア」

今まで襲って来なかったのが不思議で仕方がない。

そんな事を考えながら、アスナとアルトリアの元へ向かっていたレンの視界が、世界が”換わる”のを捉える。

「『エンコンバンデデンティア・インフィニータ無限抱擁』？いや、空間を閉じる結界の最上級魔法かア？」

レンは世界がいきなり変わったのに、何の動揺もしない。

それどころか、即座に分析を開始する。

「誰もいねエのは、ちと寂しいか」

ドオンッ！！！！

レンを中心に、『ウーロニア・フロゴシス燃える天空』級の爆発が起こる。

そんな中、一人の黒ローブを羽織った『魔法使い』が現れる。

「……………」

ライフメイカー
造物主。

始まりの魔法使いと呼ばれる、『魔法世界』を造った『完全なる世界』の首領が降り立つ。

「ぶっ」

しかし、爆炎の中から出てきたレンは無傷だった。

というか吹き出していた。

「ギャハハハハ！！ アマテルちゃんよオ。 ンだア？ その思わせ振りの登場はア？ 現実^{リアル}にビビッて目エ背けてたインテリちゃんとは思えねエよなア！！」

「…………私とて、”貴方”を相手にしたくはなかった。ただ、事は急務だ。済まないが、少々ここで時間を潰させて貰うぞ。武の神よ」

それは、いじめられっ子がいじめっ子に必死で言い返している様に見えなくもない。

事実、^{レン}凄王と造物主との力の差は、それ程までに広がった。

レンは、唇を歪めながら周囲を見渡す。

既に龍眼を発動しているレンは、世界を隅々まで観る事ができる。

「…人形共がいねエのを観ると、ここで俺を押さえてる間にアスナア拐おオって魂胆か？」

「…………まあ、差違は無い」

「ハッ！イカレンのは一人でやれや！オマエの人形共でアルトリアをどオにか出来ると思ってンのかア？」

何考えてんだこのバカ？、と、レンは信頼の言葉を吐く。

アーウェルンクス達が束になっても、自分の従者^{サーヴァント}は揺るがないと。

「フ……フフフ」

「あ？」

しかし、蟻と星ほどの力の差があるというのに、造物主は笑っていた。

対照的に、レンは笑いを止め、眉を潜める。

造物主のそれは、虚勢の笑いではなかった。

「確かに、デユナミス達では貴様の『剣』を潜り抜ける事は不可能だろう。アレと手を組むのは些か躊躇したが……」

「……………何言つてんだ？」

理解出来なかった。

一体何が造物主に自信を与えている？

「今の貴様は私を殺す寸毫の時すら惜しいはずだ」

「……………何だと？」

「転生者、というのだろうか？」

「トメー・アル勿イースアナルキアース
『無極而太極斬』 ツツ……………!!」

それからのレンの行動は早かった。

自身の得物で結界を断ち切り、世界を穿つ。

「フ、足掻けよ『アダム』」

結界魔法から力業で抜け、二人の元へ向かった。

だが、レンは先程の造物主の言葉を即座に否定する。

転生者？フザケンじゃねエ。

それは、まだ幼さの残る少年の姿をしていた。

紅い布を腰に巻き、同じく紅い布をバンダナのように頭に巻いている。

裸の上半身と顔……目に見える素肌の全てに黒い刺青が刻まれていた。

「オイオイ？救世主^{ヒーロー}ってのは遅れてやって来るッーけど、コレは遅すぎじゃね？」

『この世^{コイツ}全ての悪』は、転生者^{そんなもの}では済まない。

想定外（後書き）

千雨 二十五票

真名二十票

茶々丸二十二票

アキラ十八票

楓十一票

さよ八票

のどか六票

まき絵三票

千鶴四票

夕映二票

裕奈二票

古三票

玉藻十票

メディア六票

スカサハ一票

刀子四票

シャークティ三票

確定者は アスナ、木乃香、刹那、エヴァ、アルトリア、アリア。
サブヒロインとして先生陣です。

感想、アンケート待ってます！

宣戦布告（前書き）

かなり無理矢理、ご都合主義ッ！！

なにより皆さんの反応が怖い

宣戦布告

side

レンはそれを知っていた。

第五次聖杯戦争の約70年前に起きた第三次聖杯戦争の際にアインツベルン家に召喚され、敗れた後に聖杯に吸収されたサーヴァント。

悪で在れ、そう願われ生贄にされ死んだ時、その本質に絶対悪の因子を持った英霊が誕生した。

憎まれることで世界を救った英霊……。

だが、何故そんなものが『ネギま^{ニギ}』いる？

転生者……と考えれば簡単だ。

しかし、レンの龍眼は転生者を転生者であることを観抜く事も出来る。

その眼が訴え掛けてくるのだ。

『コイツは違っ……と。

それ以上に、レンが簡単にアルトリアやアスナに転生者の接近を許すか？

レンは半径数十キロ圏内に転生者がいれば認識出来る。

事実、目の前に居てもコイツを転生者として認識出来ない。

つまりコイツは、転生者じゃない。

しかし、仮に復讐者^{アヴェンジャー}として、最弱の英霊がアルトリアと遭遇すれば潰されるはずだ。

思考が淀みなく働いている時、それが視界に入った。

その、近くにアルトリアが傷だらけで倒れている姿を。

「
ッー!!」

レンは思わず怒りの沸点を越えそうになるが、思いとどまる。

ここでキレたらアルトリアも巻き込まれて死んでしまう。

アスナは既にここには居ない。おそらく人形共が連れ去ったのだろ
う。

今出来る事はコイツからどれだけ情報を引き出せるか。

「
アン・コスター
……………」の世全ての悪?」

「オオッ！正解正解大正解！！流ッ石モノホンの神サマ、しかも管
理者から選ばれた特別ときたモンだ。できそこない造物主とはやっぱ違うねエ。
アン・コスター
そ、俺は『この世全ての悪』。間違っちゃいねエよ」

ゾロアスター教の悪の容認者である神霊と自称する少年は、口を三日月の様に裂いて笑う。

「何でこんなトコいんだよ……。聖杯はブッ壊れて、受肉出来なかったンじゃねエのかよ！そもそも俺とオマエじゃア『世界』が違うだろオが！！何でアスナを拐ってやがる！？」

ネギまも漫画の世界だから、f a t e が有ったつておかしくはないが、それが『この世全ての悪』がここに理由にはならない。
アン・リマユ

「ああ、それねそれ。俺はあの時、確かに現界出来ずに消し飛ばされた。そこに転がってるオマエのお氣に入りにな」
サーヴァント

「だが、吹き飛ばされた位じゃあ合計12体分のサーヴァントの溜まりたまった魔力は消えねえ」

「……………」

「ツつっても、聖杯の欠片がなけりゃ宝の持ち腐れだ。あの？『世界』じゃあ俺は現界出来ない。仮に有ったとして、また修正力が働いて失敗するだろ。この『世界』にもアンタがいる様に」

「だったら簡単だ」

アン・リマユ
この世全ての悪はどこぞの政治家の様に大仰にアピールする。

「聖杯の欠片が必要のない器がある『世界』に行けばイイ。『魔法』ぐらいの奇跡を起こせるだけの魔力が大聖杯の中にはあったからないやはや、並行世界様々だぜ」

「了才解。つまりソイツは俺がオマエの死体でギネス取れつつウ解釈でイインだな」

「おつと怖い怖い、そんな眼をむけるなよ。まあ、確かにこの世界にも修正力はあった。しかもとびきり強烈な奴が目の前に。でもまあ、悪運は俺に味方したぜ？」

「……俺がオマエを殺せねエとでも言いてエのか？」

「だってお前忙しいじゃん」

アンリマユの言葉は、実に今のレンの状況に合っている。

「只でさえ転生者つつう馬鹿共のせいで忙しい上、今は世界の終わりの瀬戸際だ。それらをイッペンに終わらせて更に俺を止める^{アンリ・マユ}なんざ、どこのマゾゲーだって話だ。もしくは難易度デスクラスの戦争ゲーか？」

アンリ・マユは、とても軽く言うが、実際現状の問題は山積みだ。

最悪、造物主は紅き翼が何とかするとして、オスティアの崩壊はレンならどうとでもできる。だが、それではアスナが最低2年は封印されてしまう。

更に元老院も気になる中、それらを止めるのがお使い程度に思えてくる『この世^{なんたい}全ての悪』が現れた。

レンは確かに、これでもかと言うほど追い詰められている。

だが、

「それがどオした？」

そんなことではレンは揺るがない。

「造物主を殺す、元老院も潰す。オマエを現界させねエ」

「理想論だな」

「出来ねエと思うか？」

アンリ・マユは嬉しそうだったが。

「マジでやりそうだな。そりゃそうか、どこぞの人格破綻者ことみなきれいの様にやアいかねえな。ま、あんな奴の真似事出来る奴がいたら終わりだな」

「……………ぶぜ」

「…はい？」

「余裕ブツこいてる所悪イが……………首、飛

ぶぜ？」

ザンッ！！！

瞬間、アンリマユの頸と胴が切り離された。

別にレンが何かした訳ではない。

斬ったのはアルトリアだ。

「ハアッ……ハアッ……ぐッ……………」

「アルトッ！！！」

レンは剣で何とか体を支えるアルトリアの元に走った。

「よく生きてた、アルト」

「すみません、アスナが……クッ」

レンがキレずに済んだ要因の最大の要因は、アルトリアの眼は死んでいなかった事だ。

もしアルトリアが死んでいたら、造物主には悪いが、魔法世界は終わっていただろう。

レンは自分に注意を向け、満身創痍の状態でアルトリアがアンリ・マユを仕留める機会を窺っていたのだ。

だが、

「まだです……レン。奴はまだ……」

「分かってる」

こんなモンじゃ終わらねエ。

「痛つてエなあ、いきなり首飛ばすコタアねえでだろ。てか、バレてたか」

その言葉を放ったのは、紛れもなくアンリ・マユだった。

「当たり前エだ。こんなんで終わるンだったら、オマエなんぞにアルトが傷食らう訳ねエだろオが」

切り落としたアンリ・マユの首と胴体が動いている。

胴体が、首を拾い。くつつける様に合わせると、泥の様に混ざり合い、再生している。

「この世全ての悪は本来、人間の中に悪意がある限り、不変不滅の存在。その力が、今は不完全として現界してンのか」

そうでないとなが、アルトリアに勝てる要素が無い。

「またまた正解。つても、この魔力はオレの意思を出させるだけの媒介に過ぎねエ。もう一発エクスカリバー食らわせたなら消滅するだろうがな。だが、大聖杯が有る限り何度でも顕現可能だ」

「つまり、大聖杯を潰したら終わりってトコか」

「人間の中に悪意が消滅したらな」

人間の憎しみがこの世に存在する限り、物理魔力的破壊では、『この世全ての悪』は殺せない。

「ああ、後は造物主と組んだ理由だったな。簡単だよ、その方が手っ取り早かったからだ」

「……………」

「態々造物主と組んで、黄昏の姫御子を拐った。ここまで言えば、アンタなら分かるだろ？」

「……………まさか」

アンリ・マユが、裏切るかもしれない造物主と態々手を組んでも、アスナを拐った理由。

考えてみたら、そんなもの一つしかない。

「
黄昏の姫御子が、聖杯^{オレ}の寄り代としては最高なんだよ」

「
殺すッ！……！！」

ドオンッ……！！

レンが睨むだけで、アンリ・マユの地面が吹き飛ぶ様に破壊される。
しかし、

「アハハハハッ！！！！無駄だ無駄！！
言つたる、この”オレ”は末端とはいえ、『この世全ての悪』だ！
その殺意がオレを生かすんだぜッ！！！」

即座にアンリ・マユの体が、泥から再構成される。

「それにオレの事ばっかじゃなく、自分の従者サーヴァントの心配した方がイイ
ぜ？」

「ッ！？」

「ああっ！！！」

直後、抱えているアルトリアが悲鳴を挙げる。

アルトリアの体が、茨の様に黒く侵食していつているのだ。

「まさか

黒化！？」

「またまた正解。進路希望を探偵にした方がイイな、アンタ」

「……………デメエ……………」

「にしても……………随分黒化が遅いな。あ、成る程！僅かにオマエの魔力が供給されてるからか。アララ残念、セイバーは奪えなさそうだな……………オイオイ」

思わず、アンリ・マユが冷や汗を流す。

キイイイイイイイイイイイイイイイイッ！……………！！！！！！

「『ディードライブプロミネンスフレア アクセラレーター
速』 + 『火』 in 『一方通行』」

「それただの光速プラズマ爆撃だよな！？」

レンの前方。半径数十キロが吹き飛ぶ。

いかにアンリ・マユの末端とはいえ、既に何発かアルトリアの約束^エされた勝利の剣を食らっている。その状態でこれを喰らえば、大聖^{ほん}杯^{たい}に帰らざるえないだろう。

『^{アン・コル}この世全ての悪』は、宣戦布告した。

アルトリアを黒化で侵食し、アスナを拐うという最悪の挑発をして。

この接触でこの戦争の結末は大きく変わった。

世界は体験するだろう。

復活した邪神、怒り狂った武神。その二人の神々の戦いを。

確かに、どれだけ攻撃しても消滅させても、人間にほんの一片でも悪意が存在している状態で、『この世^{アン・リマユ}全ての悪』は滅ぼせない。

レンのアレを除いて。

宣戦布告（後書き）

千雨 二十五票

真名二十一票

茶々丸二十二票

アキラ十八票

楓十一票

さよ九票

のどか六票

まき絵三票

千鶴四票

夕映二票

裕奈二票

古三票

玉藻十票

メディア六票

スカサハ一票

刀子五票

シャークティ三票

しずな一票

レンによるブチギレ世界崩壊フラグ立ちました。（オイ

本契約（前書き）

やっ
ち
や
っ
た
ぜ
(
、
)

本契約

Sideアルトリア

これは何だ？

[illegible]

始まりの刑罰は五種。

悪で、あれ。

ドクンッ、

私は瞬時に理解する。理解させられる。

「これが……アンリ・マユこの世全ての悪……」

幾千、幾万、幾億もの怨鎖の声と共に、泥で出来た腕が私に伸びてくる感覚。

分かる。これは私を呑み込むつもりだ。

泥は、私の四肢を掴み、呑み込もうとするが、何かに弾かれた様に霧散する。

微量な何かが、私を守ろうとする。

長い間傍にいたから分かる。これは、レンから供給されてくる魔力だ。

だが、ラインが不明瞭な為に、その膨大な泥が魔力ごと呑み込む様に、口を開ける。

これに呑み込まれたら最後、私の体が、私の魂が、私という存在が汚染される。

奴の操り人形にされ、マスターに刃を向けてしまっ

「ふざけるな……ッ」

私の主に、私を救ってくれたあの人に刃を向けるだ……！？

そのような真似をするぐらいなら、

いっそ

！！！！

「アルト！アルトッ！！」

意識が目覚め、瞼が開きレンの顔が見える。

表情が、焦りと悲痛に歪んでいる。

馬鹿者だな、私は。

「アルト！！返事しやがれッ！」

「ハアッ……ハアッ……レン、すみま、せん。不覚を、とりま
した」

レンにそんな顔をさせるなんて、自分が嫌になる。

下半身の感覚が痛み以外なくなっているが、そんなもの、レンに苦痛を与えている事に比べれば気にも止めなくなる。

「気にすんな、んな事アどオでもイイ。今は
「レン、頼み
があります」……………何だ？」

「私を
殺してください」

「……………俺を馬鹿にしてンのか？」

「このままでは、貴方に剣を向けてしまう。それだけは……………そんな事をするぐらいなら」

死んだ方がマシだ。

ズグン！！

「　　クッー！レン…………早くッ…………」

侵食速度が跳ね上がる。レンの魔力の恩恵の限界だろう。

レンは暫く目を閉じ、開く。

「……………しゃアねエ、か。目エ閉じろ、アルト」

ああ。最後迄、貴方と共に戦えなかった事が心残りですね…………。

レンの指示通り、目を閉じる。

「最後じゃねエよ」

不意にそんな呟きを聴いた時、とある箇所から感触があった。
。

本契約（後書き）

突然ですが、『^{ゲート・オブ・バビロン}王の財宝』の宝具とかの募集をします。

自分で知ってる宝具少ないので、こういう伝説のこういう効果の宝具アルヨ的な感じでお願いします。

それと、次の更新が少し遅れます。もう一つの作品が2、3話出せたら再開しますので、ご容赦ください。

千雨 二十六票

真名二十一票

茶々丸二十二票

アキラ十八票

楓十一票

さよ九票

のどか九票

まき絵三票

千鶴四票

夕映二票

裕奈二票

古三票

玉藻十一票

メディア六票

スカサハ一票

刀子五票

シャークティ三票

しずな一票

確定者は アスナ、木乃香、刹那、エヴァ、アルトリア、アリア。
サブヒロインとして先生陣です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1949w/>

ネギま！ ～二人目と呼ばれた男。～

2011年10月8日20時57分発行